

流域圏 担い手づくり事例集Ⅳ



錦二丁目都市の木質化プロジェクト



矢作川流域圏懇談会
2023年3月

矢作川流域圏懇談会 とは…

長野、岐阜、愛知の3県を流れる矢作川には、矢作川沿岸水質保全対策協議会の活動に代表されるように、“流域は一つ、運命共同体”という共通認識のもとでさまざまな課題に取り組んできた歴史があります。

2009（平成21）年7月に河川法に基づいて「矢作川水系河川整備計画」が策定され、その中で治水、利水、環境、総合土砂管理、維持管理などの課題に対し、民・学・官の連携・協働による取組が必要であることが明記されました。これを受けて国土交通省豊橋河川事務所は2010年8月、流域住民・関係機関も含めた話し合いを通じて連携・協働の取り組みを行うことで、流域圏全体の発展につなげることをめざす「矢作川流域圏懇談会」を立ち上げました。

流域圏懇談会のメンバーは学識者・行政・関係団体・市民団体などで構成され、地域部会（山・川・海）や市民部会に所属し、各々が設定した課題の解決策に向けて情報を共有するため、ワーキンググループやフィールドワークを行っています。

流域圏担い手づくり事例集 とは…

矢作川流域圏懇談会山部会は、流域の山の問題を「人と山村の問題」と「森林の問題」に分けて整理しました。水源の森づくりを担う山村で過疎化と少子高齢化が進んでいるのが「人と山村の問題」です。解決の糸口として、2013（平成25）年度からの4年間、矢作川流域で主として中山間地振興に携わる団体（一部川や海の活動団体も含む）の取材記録をまとめ、流域内の多様な主体によるネットワークづくりを支援する「山村再生担い手づくり事例集」を4冊発行しました。2017年からは、取材先として川や海の環境保全や水辺空間の再生・利活用に携わる団体を増やし、タイトルを「流域圏担い手づくり事例集」と改め、2018年までに2冊を発行しました。

これらの事例集づくりを通じ、流域内のネットワークが更に広がり、流域内でお金、人材、物がまわる流域内フェアトレードと、食・エネルギー・水・医療・教育・安心安全の自治が進むことをめざしています。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

2019～20年度は流域圏懇談会10年誌作成のために事例集の発行を休止しました。この10年誌で6冊の事例集づくりをふりかえり、持続可能な流域圏づくりのためには山、川、海のエリアだけでなく、都市域の住民を巻き込んだネットワークづくりが必要であるという結論に至りました。そこで3冊目からの「流域圏担い手づくり事例集」（2022年～）は、これまでのように個別の取材記録をまとめるのではなく、都市を巻き込んだ流域圏づくりにつながるひとつのプロジェクトを取材対象とし、プロジェクトを支える複数の方にお話をうかがって、その立体像を描くことを試みています。



目 次

1	錦二丁目都市の木質化プロジェクト関係団体	1
2	プロジェクトに関わってきたさまざまな人びと	
	故・延藤安弘さん	4
	名畑 恵さん	7
	滝 一之さん	9
	船橋浩三さん	11
	河崎泰了さん	13
	大橋俊夫さん	15
	浅井さんご一家	17
	高野雅夫さん	20
	佐々木康寿さん	22
	山崎真理子さん	22
	山田政和さん	26
	高山治朗さん	28
	西川早人さん	30
	戸田友介さん	30
	鍋田拓哉さん	32
3	愛知県のプロジェクトへの関わりと展開	35
4	おわりに	38

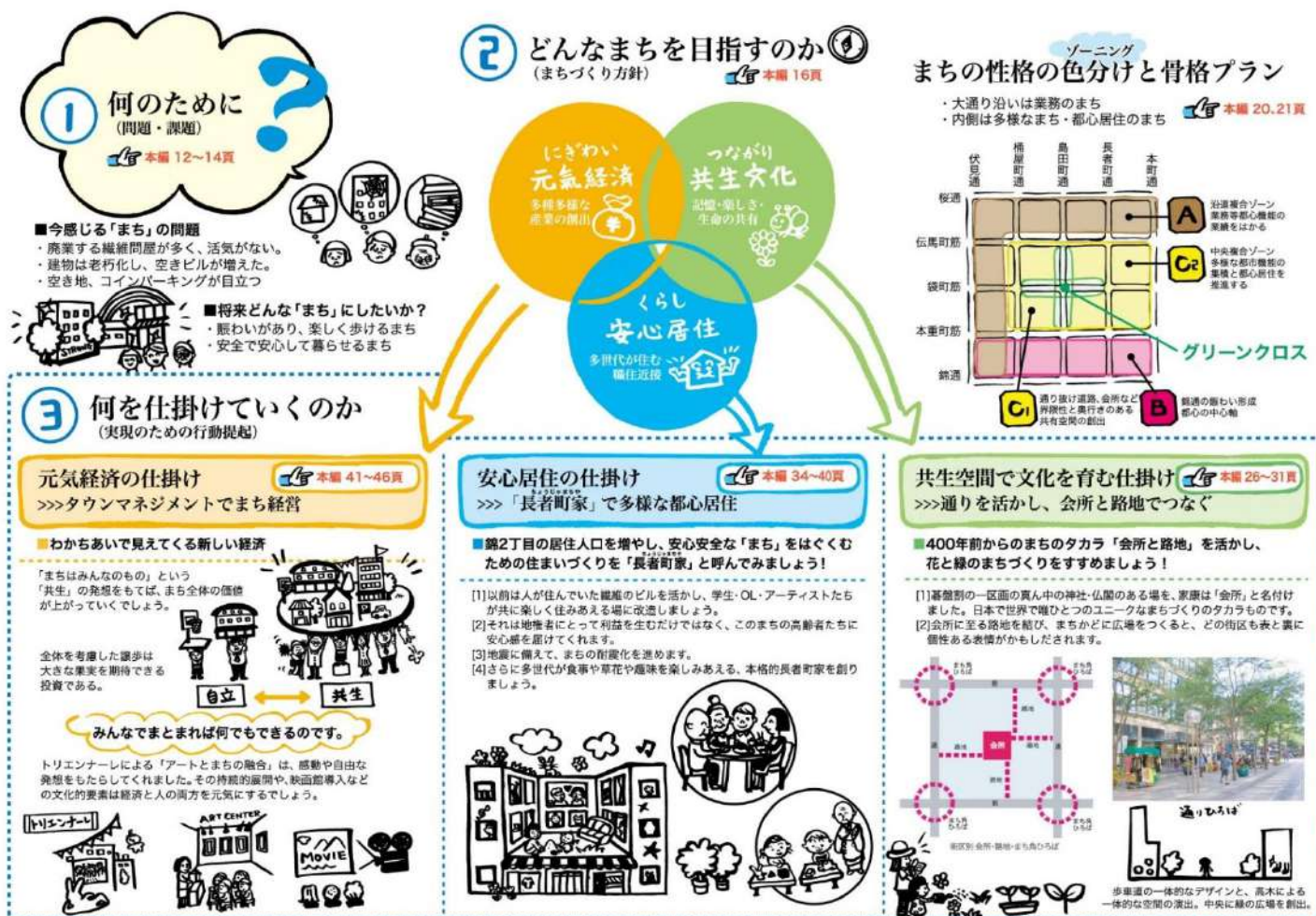
1. 錦二丁目都市の木質化プロジェクト関係団体

名古屋市中区にある錦二丁目付近は、かつては長者町繊維問屋街を中心に活気のある商業地だったが、繊維産業の衰退や人口減少と共に、まち全体が個性と活力を失い、風俗産業の侵食や治安と風紀の悪化が懸念される状況となった。そこで2004年以降、まちづくり協議会が中心となって、都市の木質化を中心に地域の活性化を進める取組が始まった。この事例集の最初の章では、錦二丁目の都市の木質化に関わってきた団体を紹介する。

●錦二丁目まちづくり協議会（2004年設立、活動は2002年から開始）＊通称「まち協」

錦二丁目にある長者町にはもともと6つの町内会と、繊維問屋の組合である「名古屋長者町織物協同組合」があった。隆盛を極めていた頃は、100社以上あった繊維問屋だが、貿易の自由化や海外に生産拠点を移す会社が増えて繊維業が衰退、今は20社足らずに。繊維の会社が不動産に業態を変えたり倒産・廃業したりと空洞化も進んだ。そんな中、新しいまちづくりを考えるべきではないかという声上がり、2004年に「錦二丁目まちづくり協議会」（まち協）が設立された。

当初は再開発を念頭に置いた活動をしていたが、まちの縁側育くみ隊代表理事の延藤安弘先生の指導を受け、地域自治の新しいしくみをつくる方向に舵を切った。延藤先生を通じて名古屋大学大学院環境学研究科の先生方とつながったことで、低炭素モデル地区の指定を受け、多くの人や団体を巻き込むことになる都市の木質化の取組が錦二丁目ではじまった。



これからの錦二丁目長者町地区まちづくり構想（2011-2030）手引き編（錦二丁目まちづくり協議会HPより）

●まちの縁側育くみ隊（2003年～）＊通称「まち育」 まち協との関わり：2004年～

かつて町にも田舎にも縁側がいっぱいあった
そこではおのずから人と人は出会い
人と風と光と土と緑と鳥は溶け合い
生きる希望がおだやかにひろがっていった
今日わけあって縁側は姿を消してしまったが
エンガワのようにおいしい場所<まちの縁側>を
たのしみながら共に生み出し育くんでゆきたい

わたしたち<まちの縁側育くみ隊>は、福祉と生涯学習・文化と芸術・環境の保全・子育てなど、さまざまな活動が互いに出会い、混ざり合い、対話を生み出す場としての<まちの縁側>を育くみます。
まちとくらしを支援するさまざまな事業を、人々の善意とボランティア精神をもって行い、市民・行政・企業が参画し、それぞれの責任を果たす市民社会の実現と、市民公益のために活動します。

（NPO法人 まちの縁側育くみ隊HPより）

2003年に延藤先生らが「まちの縁側育くみ隊」（まち育）を名古屋で設立。住民参加型まちづくりの実践支援、公共施設の住民参加デザイン、「まちの縁側のあるいえ」づくり支援、まちの縁側づくりのノウハウの蓄積を行ってきた。

延藤先生が2004年、まち協の招聘を受けたことから、まち協とまち育の関わりが始まった。

●都市の木質化プロジェクト（2009年～）＊通称「都市木」 まち協との関わり：2010年～

2009年、グローバルCOEプログラム（国際競争力のある大学づくりの推進を目的とする文部科学省研究拠点形成等補助金事業）として、「地球学から基礎・臨床環境学への展開」というプログラムが名古屋大学で立ち上がった（2013年に終了）。そこから名大の「都市の木質化プロジェクト」（都市木）が生まれた。名大大学院環境学研究科の村山顕人先生、高野雅夫先生、生命農学研究科の佐々木康寿先生、山崎真理子先生らが中心となって、川上の林業、中流の製材業、流通業、川下の建築業を視野に入れて、トータルに都市の木質化を進めることをめざした。村山先生がまち協に関わっていたことで、錦二丁目が都市木の主要なフィールドになった。

2009年～



社会と木材との関わりと
その価値観を変えるために

都市の木質化プロジェクトは、名古屋大学の多分野の研究者が実務者や地域のコミュニティと協働し、森林と都市とのつながりの希薄さが抱える問題の本質的解決をめざし、木材の使い方の普及と人づくり、そして都市への実装を進める取り組みです。

都市の木質化を支える取り組みの3つの柱

木を
創る

森づくり

地域の資源である木材の活用を進め、森づくりに貢献するために、ユーザーと一体となった木材の利用や共同施工により、木材の新たな使い方に挑戦しています。



木を
担う

人づくり

森と街の交流を促すツアーや木を科学する勉強会など、多世代のユーザーが森と街の相互のニーズを共有するため、多様な交流や研修などに取り組んでいます。



木を
使う

街づくり

名古屋市の都心である錦二丁目地区において、まちづくりと一体となって、都市における多様な木材利用を展開する都市の木質化を進めています。



●旭木の駅プロジェクト（2011年～）＊通称「木の駅」 まち協との関わり：2013年～

「木の駅プロジェクト」は、伐り置き間伐により山に放置されている材を山から出し、土場まで運べば、1トン（軽トラ約2杯分）で6,000円相当の地域通貨「モリ券」が対価として得られるという仕組み。2009年に岐阜県恵那市で始まり、現在、全国で74カ所に広がっている（2019年末時点）。

愛知県豊田市旭地区では2011年3月、全国で3番目に、まずは社会実験として「旭木の駅プロジェクト」の取組を始めた（「山村再生担い手づくり事例集」Ⅰ、Ⅳ参照）。今年で12年目を迎え、地域経済の活性化や森林再生・土砂災害抑制といったハード面の効果にとどまらず、子どもの林育の推進・担い手の育成、定住者の新たな仕事、住民の新たな活躍の場の創出といった効果をもたらしている。

名古屋大学の高野先生は長年豊田市で中山間地の振興と担い手育成に尽力しており、木の駅のメンバーとはかねてから親交があった。2013年に名大の高野先生が、木の駅メンバーを都市木の佐々木先生に引き合わせて「一緒に何かやれるといいね」という話をしたことがきっかけで、木の駅とまち協のつながりが生まれた。



次章では、錦二丁目都市の木質化プロジェクトをともに育ててきた以下の皆さんの取材レポートを掲載する。

まちの縁側育くみ隊 … 故・延藤安弘さん、名畑 恵さん

錦二丁目まちづくり協議会 … 滝 一之さん、船橋浩三さん、河崎泰了さん、大橋俊夫さん

都市の木質化プロジェクト … 高野雅夫さん、佐々木康寿さん、山崎真理子さん

旭木の駅プロジェクト … 高山治朗さん、西川早人さん、戸田友介さん

アーティスト・デザイナー … 浅井さんご一家

豊田森林組合 … 山田政和さん

愛知県林務課（当時） … 鍋田拓哉さん

(執筆：洲崎燈子)

2. プロジェクトに関わってきたさまざまな人びと

故・延藤安弘さん

NPO法人まちの縁側育くみ隊代表理事（初代）
錦二丁目まちづくり協議会マスタープラン策定企画会議議長

レポート執筆者：名畑 恵（延藤安弘アシスタント／錦二丁目を中心に17年活動を共にする／現NPO法人まちの縁側育くみ隊代表理事）



●全国で活躍し、名古屋が終の棲家となった

レンゲ畑の広がる大阪に1940年に生まれる。北海道大学工学部建築学科卒業、1967年京都大学工学部助手、1985年から、熊本大学教授、名城大学教授、千葉大学教授、愛知産業大学教授を歴任。専門は建築、都市計画、生活空間計画学。

研究教育と共に、京都「ユーコート」、熊本「Mポート」等のコーポラティブハウスや、全国各地での市民参加による公共施設デザイン等に携わり、建築プロジェクトの社会的な提唱と実践をしてきた。神戸真野地区、東京世田谷、名古屋錦二丁目等のまち育てに長い間携わり、先駆的な仕事をしてきた地域プランナーとしても知られる。また、NPO法人千葉まちづくりサポートセンターを立上げ、名古屋に赴任すると同時にNPO法人まちの縁側育くみ隊を設立するなど、市民・行政・企業・専門家のパートナーシップ型のまち育ての支援組織を担ってきた。

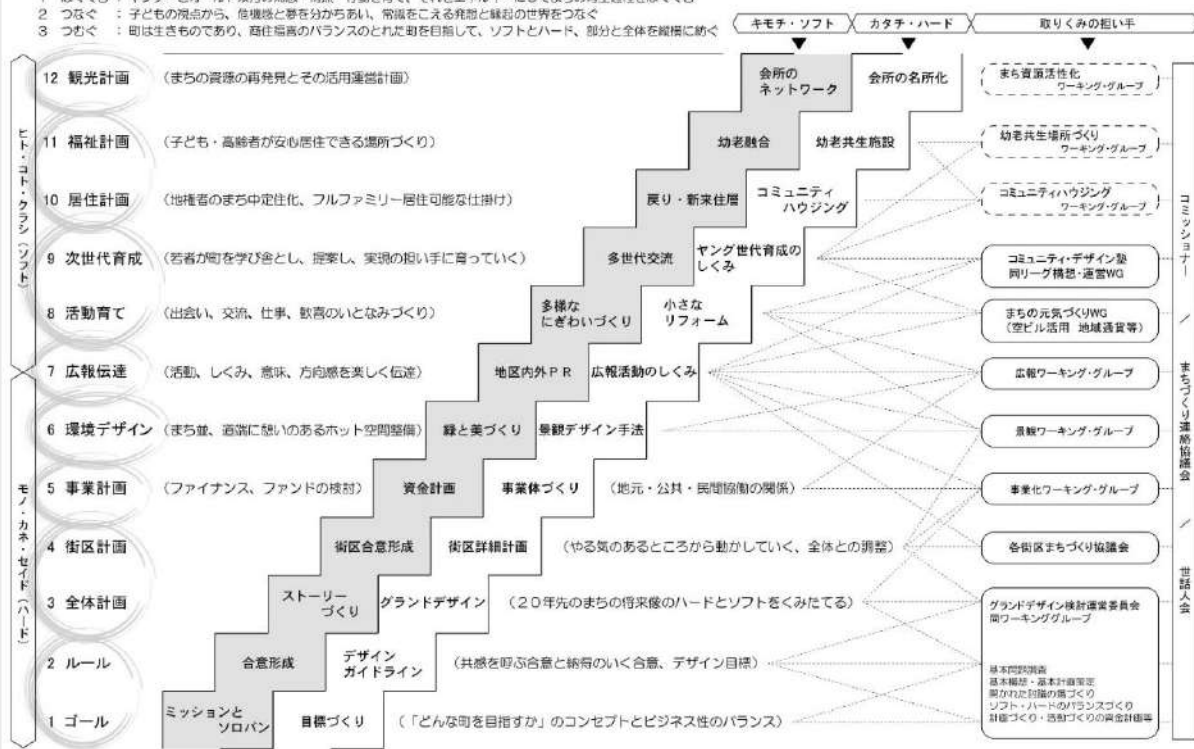
●錦二丁目との出会いから、都市と山をつなぐ発想へ

延藤安弘は錦二丁目まちづくり協議会設立総会（2004年）での基調講演で、階段構図のロードマップを提起した。学生の立場で携わっていた筆者はこの時には「気合が入っている」ぐらいの理解であったが、今になってすごさがわかる。一度の講演に対してヒヤリングや基礎リサーチを元に

図 みんなで考えよう・錦2丁目の見とおし（2004年延藤安弘）

●考えるポイント

- 1 はぐくむ：ヤング・とオールド双方の知恵・情熱・行動を育て、それをエネルギーにしてまちの再生過程をはぐくむ
- 2 つなぐ：子どもの視点から、他郷感と夢を分かちあい、常風をこえる発想と縁起の世界をつなぐ
- 3 つむぐ：即ち生きものであり、居住施策のバランスのとれた道を自給して、ソフトとハード、部分と全体を縦横に結び



これだけの構図を描きあげることのすごさは今になって「預言通り」となっているからだ。その後この図を活用することはほとんどなかった。これは、地域の人たち自身が計画し、補い、共に成長するプロセスに重きを置いていたからだと思われる。

この図を解説する一つの補助線として、延藤安弘の論が「異なるものをつなぐこと」と、両義性・アンビバレントの価値を見える化することの上に成り立っていることを紹介したい。

「ヒト・コト・クラシ」から「モノ・カネ・セイド」にわたる12の柱とともに、「キモチ」と「カタチ」がセットとなった目標系列が階段のステップで描かれている。加えて、右欄にある「担い手」がないと駆動しない。

担い手のグループ群を見てみると、この時すでにみえはじめた萌芽をしっかりと落とし込んでいたことを、20年後の今になって気づく。つまり、壮大に見えて、自分たちの手で実現可能な目標として設定しているのだ。20年を経て驚嘆することばかりである。

さて、2011年に「都市の木質化」に出会ったとき、延藤安弘が描いていなかった13個目の柱に「環境共生圏」を見出したのではないだろうか。（ちなみに、延藤は1998年より「川の日ワークショップ」の総合コーディネーターを10年務めてきているように、川上から川下、海のつながりへの問題意識を深化させていた時である。）「都市の木質化」というコンセプトに刺激を受け、そして「都市と山をつなぐ」目標と「担い手」がこの時セットになった。そしてサイクリックに描かれたこの図の目標1に戻ると「ミッションとソロバン」とあるように山と共に生きる使命は経済循環と共に語られることになる。

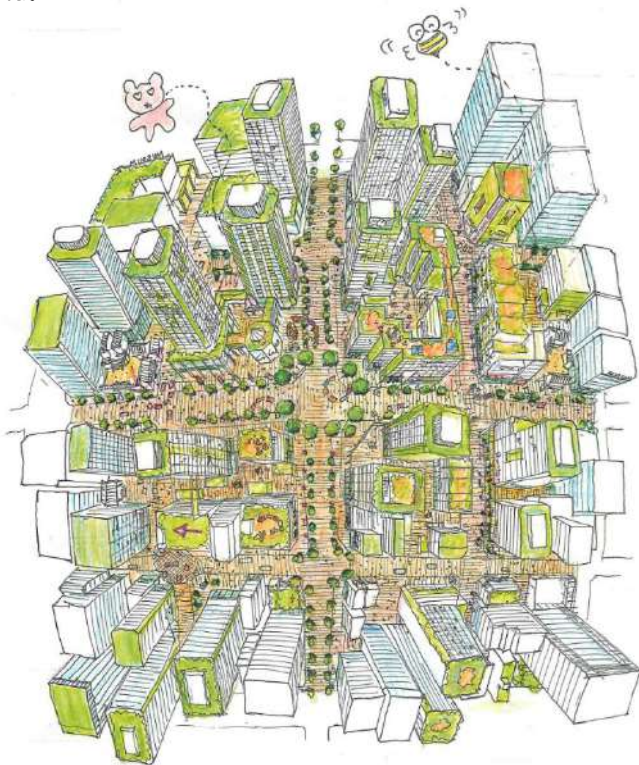
● 錦二丁目にとっての「都市の木質化」とは？

錦二丁目地区の活動の羅針盤となっている『これからの錦二丁目長者町地区まちづくり構想2011-2030』（以降、まちづくり構想）の「都市の木質化」のページにはこのようなリード文が書かれている。

「昭和30年内閣閣議決定で、木に代わってプラスチック・鉄・アルミ・コンクリートを使うことを決めました。同34年日本建築学会は木造禁止決議。その後の日本の森林荒廃と木造活用衰退の状況は眼をおおわしめるものがあります。しかし、都心で木を多面的に使いこなすこと（都市の木質化）によって、まち中に柔らかい空間が生まれ、山元も生態的にも経済的にも元気になっていく。安心居住の仕掛けのひとつとして、都市の木質化プロジェクトをおこしていきたい。」（2011年春、延藤安弘）

● 「都市の木質化」との出会い

延藤先生は、錦二丁目のまち育ての中で、「都市の木質化」は心の部分になり得ると確信したのだと思う。それは2011年2月5日の「都市の木質化『どこまでできるか？』チャレンジ—長者町リノベーション・ウォーク」を開催地として受け入れたときのことだった。森林関係者・住民・事業者・行政、研究者など合計約50名が学び合い、まち歩きを経て6グループの各分野混合チームが錦二丁目を木質化するプランを即日設計するというあつい現場であった。



錦二丁目のまち全体が木質化された将来イメージ
『これからの錦二丁目長者町地区まちづくり構想2011-2030』より

そのころ、2か月後にまちづくり構想を策定発表するというタイミングであり、3年にわたる策定プロセスの最終局面を迎えていた。当時は、錦二丁目に「住むまち」のイメージは皆無だったが、「安心居住」を構想の柱の一つとしていた。そんな中で、多様な人が共に考え、からだを動かし、つながりを育みながら、やわらかい空間を生み出していく、この日の経験が、まさに都心に「安心居住」を育むことだと確信したのではないだろうか。また、都心部の空洞化と山間部を総合的に捉えられる都市の木質化プロジェクトは、まさにまちづくり構想の「元気経済」「安心居住」「共生文化」の3つの柱が重なる心の部分に位置付けられると考えたのだと思う。ほぼ完成に近づいていたまちづくり構想に、やや強引に都市の木質化のアクションプランのページが挿入されるにいたった経緯である。

●木のいのちは まちのいのち

この日のワークショップのまとめは延藤先生がつとめた。この内容をふりかえることで、都市の木質化を心の部分に位置付けた真意をひもときたい。

【延藤先生によるまとめ】

- 木** 気が気でない都市課題の状況を木質化でリデザインしよう
の のっぴきならない森林荒廃のストップは都市の役割である
い 意表つくケーススタディ＆プラクティスを重ねよう
～継続した研究と実践を！
の のりこえ策はピンチをチャンスに変える発想から！
～まちの人の意識にまずはうったえよう！
ち チャレンジ！outside and inside by making soft-skin
～やわらかい皮膚としての木でまちの内側も外側も覆おう！
は ハザマ（間）に親密な路地、ベンチ、会所にいたるアーケードや
パーゴラを木質化でつくり、街路樹と一体で計画することで、
裏と表をむすぼう
ま まち中ログハウスで、託児所や、OLや老人など多様な人が住む状況を！
～屋上露天風呂や地下のワインセラーなどのある「ネスレ長者町」の
提案を実現させよう
ち 近くと遠くを結ぶ、生産・流通システムをつくり、モジュール化した
木パレットで屋上木質化、アーケードのルーバー化、
木製すだれなどへの活用を！
の のぞましい木材リユースをまちぐるみで！多様な「木づかい」のある
長者町（錦二丁目）になろう！
い 意味深いワクワク＆リーズナブルな「木づかい」「着づかい」「気づかい」が
長者町ルール
の のんびり歩いて楽しいストリートウッドパネルや、木質化サインとしての
「まちの冠木門」など木質化の景観づくりを
ち 違う意見、トラブル、対立をエネルギーに変えよう！
～資金面など葛藤や対立が起きかねないが、それは本音トークをするチャンス
になる。「何のために？」「森林にとっては？」「都市にとっては？」を
たゆまず問い続けよう

以上、12点の頭文字を縦につなぐと「木のいのちは まちのいのち」となりました。まちと森林は人が関わることで呼吸する関係になる。「名古屋大学グローバルCOEプログラム」という分野を超えた大学のウィズダムと、地域の意気込みがカップリングする現場の実践をこれから多様に重ねていこうやないか～！



錦二丁目ストリート・ウッドデッキにて
（撮影：2014年春）

名畑 恵さん

錦二丁目エリアマネジメント株式会社 代表取締役
NPO法人まちの縁側育くみ隊 代表理事

取材日 : 2023年1月15日
取材場所 : 喫茶七番
(愛知県名古屋市中区)
取材者 : 佐竹寅次郎、川崎海斗、筒井千遥、
沖 章枝、近藤 朗、三ツ松由有子
レポート執筆者 : 佐竹寅次郎、川崎海斗



●生い立ち

愛知県の春日井市で生まれ、高校までを過ごした。高校3年生のときにNHKの番組「日曜美術館」で目にしたマッキントッシュの作品に感化されて建築を学ぶことを志し、椋山女学園大学へ進学した。

居酒屋でアルバイトをしていた時に建築家の坪井俊和さんに声をかけられたことがきっかけで、東区にある「榎木館」の保全活動「榎木館育くみ隊」に関わるようになった。この保全活動は、榎木館を地域の人々の大事な居場所として守るというアプローチで行われており、榎木館周辺の地図を作ったり、絵本展を開催したり、蔵を活用してバーを開くなど様々な活動を行った。

その活動を通して「建築そのものではなく、その中で行われている人の活動が大事だ」という考えを持つようになった。

●まち育ての世界へ

榎木館の保全活動には当時千葉大学にいた延藤安弘先生も関わっており、延藤先生やその研究室の学生と親交があった。そのため、学生時代からまち育てに関する活動にも巻き込まれていた。

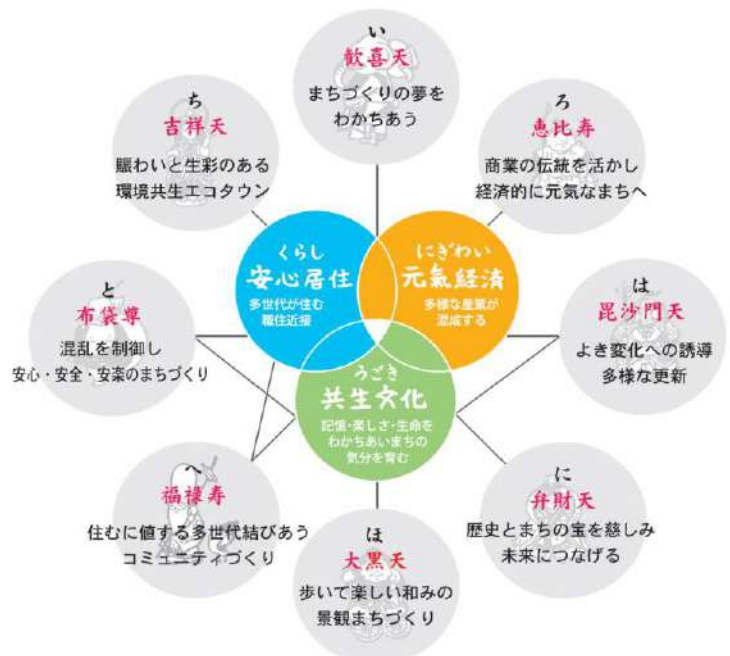
榎木館育くみ隊をはじめとする様々な活動や市民の機運の高まりもあり、榎木館は名古屋市の指定文化財として守られることが決まり、榎木館育くみ隊はひとまずその役割を終えた。そこで、この経験をまちに生かそうと、NPO法人「まちの縁側育くみ隊」が延藤先生を中心に立ち上がった。そこから本格的に各地のまち育てプロジェクトに関わるようになる。

錦二丁目まちづくり構想 2011-2030

●都市の木質化と関わるいきさつ

錦二丁目はもともとまちづくりが盛んな地域だった。地域の人々と100回くらいワークショップを行いながら「まちづくり構想」という活動の指針を作成中であった。

そんな最中名古屋大学ではグローバルCOEプログラムで森林を持続可能なものにしていくという取り組みが行われていた。その一環で都市の木質化を実践できる場所はないかと探していたところ、錦二丁目を見つけたという。都市の木質化についてのお話を聞き、これは是非私たちの町で行いたいということで「まちづくり構想」に取り入れた。都市の木質化プロジェクトは名古屋大学と錦二丁目の動きがタイミングよく重なることで実現できた。



地域自治の仕組みとして立ち上がった錦二丁目エリアマネジメント(株)でも、都市の木質化プロジェクトを持続可能なものにすることは重要なミッションと捉えている。

●都市の木質化プロジェクトに対する思い

まち育て活動の観点から言えば、木を使うとセルフビルドできるのが大きい。セルフビルドできることで、みんなが関われるし、みんなを巻き込むことができる。自分たちで試行錯誤できるから、身体感覚として残るし、机上では気づけなかったことにも気づくことができる。歩道の拡幅など、多様なまちづくりのための実験的な取り組みもやりやすい。

そして、そういう活動で作った木質化ベンチ等は、実際にまちの滞在性能を高めるのに貢献してくれていると思う。コーヒーを飲んだりお弁当を食べる場所としてたくさん活用されていて、愛着を持ってくれている。

また、この木質化活動自体が、まち育てに関わる人たちの精神的な柱になっている。まちの人たちが自慢できる活動になっていて、他のことで迷った時には木質化活動に立ち戻ることができる。県産材の活用のもとということで、小さなエリアと社会や環境とのつながりが見えやすいという点が良い。

●プロジェクトの課題点

木材をまちづくりに使おうとしたときにやはり予算が限られているので、なるべく安く木材を仕入れられないかという交渉をしたこともあった。しかし、森の現状や林業のおかれている経済的問題を学び、反省している。地域のまちづくりとして木質化プロジェクトを行うにしても正当な対価を払うことは大切だ。これからも森林との関わり方について都市としての役割を拡大していきたい。



歩道上にセルフビルドで製作した「大きな木質化ベンチ」
(2022年2月)



錦二丁目エリアマネジメント拠点「スペース七番」にある
キッズスペースにて



長者町通りの歩道拡幅社会実験における拡幅部分の
「道普請」の様子



錦二丁目ストリートウッドデッキでくつろぐ取材班

滝 一之さん

繊維問屋「滝一株式会社」社長、錦二丁目まちづくり協議会理事・都市の木質化前プロジェクト長、錦二丁目エリアマネジメント（株）取締役、下長者町町内会長、名古屋長者町協同組合理事長として長者町新聞を発行。

取材日：2023年1月24日
取材場所：喫茶七番（名古屋市中区錦二丁目）
取材者：沖 草枝、三ツ松由有子、浜口美穂
レポート執筆者：浜口美穂



●糸から木へ

もともと長者町の組織としては、碁盤の目の筋ごとに六つの町内会と、繊維問屋の組合である「名古屋長者町織物協同組合」があった。隆盛を極めていた頃は100社以上あった繊維問屋だが、貿易の自由化や海外に生産拠点を移す会社が増えて繊維業が衰退、今は20社足らずに。繊維の会社が不動産に業態を変えたり倒産・廃業したりと、新陳代謝が起きて空洞化も進んだ。そんな時に、新しいまちづくりを考えるべきではないかということで2004年に「錦二丁目まちづくり協議会」（まち協）ができた。

まち協でどういうものをテーマにして取り組んでいくかということで、そのプロジェクトの一つが都市の木質化（都市木）。ちょうど名古屋大学の佐々木康寿先生と山崎真理子先生が都市の木質化に取り組む中でプラットホームを探していて打診があった。当時、名古屋大学大学院環境学研究科・都市計画研究室の村山顕人先生も月に一度、レクチャーに来ていた。

最初のうちは都市の木質化といってもピンとこなかったけれども、このまちの新しい価値の創造というか、アップグレードみたいなことができるかと、お試してみたいな形で始まった。2014年に中日新聞が取材に来て「街の顔 糸から木へ」と見出しを付けてくれた。

●まち協と縁をつないだのはスミレの花

まち協ができた時は私はあえて距離をとっていた。というのも、協議会がまちのためではなく、地権者がデベロッパーとくっついて自分たちの財産を有効活用するためのところかと思っていたから。その距離を埋めたのは、1cmの隙間に生えていたスミレの花だった。

2010年の春、あいちトリエンナーレ（2010年夏に初めて長者町も会場になった）のアーティストとまちの縁側育くみ隊の延藤安弘先生、名畑恵さんが「昔のまちの話を聞かせてくれ」と訪ねてきた。その帰り際に、延藤さんと名畑さんが建物と歩道の間にひっそりと咲くスミレに気づいた。私が「家康が城下町をつくる前はこの辺も野原だったと思う。だからスミレは先住民。誰も気づかないスミレだけど、毎年種を集めてはあちこちに撒いているんです」と話したら、二人はその話に一番感激したと。まち協にもこんな人がいるんだと思い、一気に距離が縮まった。これをきっかけにまち協に入り、理事を務めることになった。



ウッドデッキ1代目と2代目。いずれも真ん中が滝さん。
（2014年4月、2015年12月、都市の木質化project facebookより）

●都市木のもう一つの在り方～山と都市をつなぐシステム

豊田の山に初めて行った時に、間伐材がそのまま放置されていて、もったいないと思った。都市（まち）がそれを安定的に受容する仕組みがいたると思った。都市木のプロジェクト長をやっていた時の目標として、山の材料の使用権を立米いくらという形で買って、毎年まちで安定的に消費するようなシステムができるといいなと話していた。まちと山間部をつなぐシステムがいたるなど。

一番恩恵を受けているのは都市生活者なんですよ。でも、流域で洪水が起きて自分たちには関係のないことだと思っているから、関係あるということをまちに住む人たちに周知できるといいなと。それが都市木のもう一つの在り方。子どもたちにも、森の豊かさ、海の豊さに自分たちも関わっているんだと知ってほしい。都市生活者だけがいいとご取りしているような形からは脱却をする。他人事でなくなるように。安定的に需要と供給の循環ができれば、山の生活も海の生活も都市生活も守ることになる。

●今後のまちづくり体制

8～9年前に私が名古屋長者町織物協同組合の理事長を引き受けることになった時、繊維業以外の会社も入ってもらえるようにと「名古屋長者町協同組合」に改名した。そういう考えを持ったのも、まち協の理事をやって木質化に取り組んでいたからかもしれない。一業態だけでなくみんなで地域をつくっていくこと。

組合は2000年の50周年記念イベントを発端に「長者町あびす祭り」を主催。2016年のトリエンナーレをきっかけにまちの清掃活動も始めたが、今はまち協に主体を移した。組合がやってきたまちづくりは、だんだんまち協に引き継いでいってもらえればいいなと思っている。町内会とうまく結束して。

まち協は専門家などと協力しながら課題・企画を提案、実働部隊が錦二丁目エリアマネジメント（株）（エリマネ）で、この二つがまちづくりの両輪となっている。まち協の構想に基づき、地域に資する空間としてつくったのが七番地区。ここをつくるにあたって町内会長、まち協、地権者、デベロッパー、専門家などが集まって話し合いをした。その時、私は「SDGsを基本構想にした建物にしたい」と提案した。ちょうど国連がSDGsをまとめた時で、まだあまり知られていなかった頃だった。

夢物語のようだけど、野菜工場をつくったらどうかとかいろいろ話した。種（イメージ）が育つにはいろいろな組織が必要。このエリアが、イメージの宝庫であれば、自然といい企業、いい人がやってくるようになる。そういうエリアに育ってくれたらいいと思う。今、実際に錦二丁目あびす菜園プロジェクトが始まり、ビルの屋上で「宙農（そらのう）」やまちの隙間でさつまいもを育てるプロジェクトも進んでいる。

●木質化に関わることで焦点距離が延びた

私自身の変化としては、以前は近いものしか見えてなかったけど、もうちょっと遠くを見るようになった。植物は何も言わないけれど、いろいろなことを知らせてくれるサインを出している。例えば土砂崩れが起きた時に、森のせいではなく、人間の開発の仕方がまずかったかもしれないとか、そういうように「自分のせい」というものが意外とたくさん裏には隠れているなということがわかったから、焦点距離が延びたというか遠くなった。



2016年のトリエンナーレで滝さんの会社に設置された都市木ギャラリーとベンチ
（都市の木質化project facebookより）



船橋浩三さん

錦二丁目で100年以上続く東海足袋株式会社社長、錦二丁目まちづくり協議会・都市の木質化プロジェクト長

取材日 : 2023年1月24日
取材場所 : 東海足袋（名古屋市中区錦二丁目）
取材者 : 沖 章枝、三ツ松由有子、浜口美穂
レポート執筆者 : 浜口美穂



●箱物のまちづくりではダメ

この地域が地盤沈下しているのでなんとかしなきゃいけないと、2002年から活動を始めた（錦二丁目まちづくり協議会（まち協）の正式発足は2004年）。当初は、名古屋市都市再生特別地区に指定されていたので再開発を考えて動いていた。特区は、地主が5人以上集まって組合を結成して再開発をすると全事業費の2割程度は補助を得られるというもの。その中で、まちの縁側育くみ隊の延藤安弘先生の指導を受けているうちに、箱物を優先して考えているのではダメだと言われた。

たまたま延藤先生のつながりで、名古屋大学の環境学の村山顕人先生と農学の佐々木康寿先生、山崎真理子先生から学部を超えてこの地域をフィールドとして取り上げたいという話があった。村山先生は低炭素モデル地区として、佐々木先生たちは都市の木質化（都市木）、その合同という形で。ちょうど延藤先生たちとまちづくりのマスタープランを作っていたので、その中に当初はなかった木質化を組み入れた。延藤先生がこれは入れるべきだと判断したことが大きかったと思う。

その頃、まち協の副会長をしていたが、都市木が動き出した頃は積極的には関わっていなかった。2015年後半の2代目ウッドデッキを作る頃に、滝一之さんからプロジェクト長を引き継いだ。

●目に見えてわかりやすく、自分たちでやれる範囲で

例えば、木材を使った歩道拡幅社会実験、今もあちこちにあるベンチなど、木質化は目に触れやすい。木材の投入量自体は大したことないが、街なかにあるということが大きい。そこから気づきがあると思うし、この地域で何かが進んでいるということが目に見えてわかりやすい。それこそ木造のビルでも建てない限り大きく低炭素に結びつかないが、わかりやすく、そして私たちができる範囲でやるのが大事。

主体となって木質化をやるのはこの地域の企業とか住民で、私たちはその人たちに気づいてもらって、お手伝いをする。ネットワークはあるのでその提供はできる。内装だけでも木にしたいという飲食店のお手伝いをした事例もある。そういう動きが出てくることを目標にしている。まだまだこれから。大事なことは持続性だと思う。

しっかりした財源もないのにこれまでなぜ続いてきたんだろうと思う。皆さんの助けがあって継続できているんだろうなと。ベンチは、都市木のメンバーにプラスアルファで学生グループMOKKOにも声を掛けてDIYで作る。素人がDIYで組み立てることを前提にして大橋俊夫さんが設計している。そういう専門家の技術にも支えられている。2016年には、名大と愛知県、まち協の共同で応募した都市の木質化プロジェクトがウッドデザイン賞（コミュニケーション分野・ソーシャルデザイン部門）を受賞した。



※左写真：2014年、長者町通りで歩道の拡幅社会実験

※右写真：2017年、錦二丁目にあるスペインバルハヤシの屋上テラスを木質化

●七番街区は現代の会所

まち協は再開発の言い出しっぺなので、当初からデベロッパーには柵や低層階の外壁を木材でやってほしいと相当言ったが、そもそもマンションの規格に木質化なんてものはないからやれないと。ただこちら側のお金でやるなら置く分には構わないということで、木材の掲示板とか、スペース七番の中に木製の遊具を置くのは少し認めてもらった。

マスタープランに現代の会所（かいしょ）*をつくろうという方針があり、七番街区の真ん中に共用の空間をつくり、まちづくりの拠点も隣接して設けた。会所を復活し、それが地域貢献になるということは組み入れてもらった。まちづくりの拠点の整備ということで税金（国、県、市）の投入も行われた。

* 会所…錦二丁目碁盤割の一区画の真ん中にある神社・仏閣のある場を家康は「会所」と名付け、そこは住民が集う場所になっていた。

●山と都市をつなぐ原点に立ち返る

今年度（2022）の今後の事業は、この地域のまちづくり事業に関わってもらっているコンサル会社からいただいた木材で、喫茶七番に大きな本棚とスペース七番に荷物を置くサイドテーブルを作る。次年度の事業計画では、住宅都市局の都市整備に対する補助金を使って大きなベンチをもう一つ作ることを考えている。

次年度のもう一つの柱は山との連携。山との交流会はコロナ禍で中断しているが、次年度から復活しようと。そこに立ち返ろうと話している。山と都市をつなぐということが大事だと。都市と山の同時再生ということをやっているとずっと言ってきたけれど、それは現場を見ないと腑に落ちないので。ベンチ作りと山との交流、それが2023年度の二本柱になる。



※七番街区、現代の会所



スペース七番ラウンジのキッズスペース。
真ん中では亡き延藤安弘さんの等身大パネル



※2017年、豊田市旭町で森林見学



スペース七番のサイドテーブル作り
(2023年2月)

※写真は、都市の木質化project facebook、錦二丁目エリアマネジメント（株）facebookより引用

河崎泰了さん

錦二丁目まちづくり協議会副会長。錦二丁目が創業の地である株式会社竹中工務店に勤務。専門は建築だが、2005年から開発営業グループに所属。都市環境デザイン会議（JUDI）元代表幹事。都市の自然のモノサシ研究会所属

取材日：2023年1月24日
取材場所：株式会社竹中工務店 名古屋支店
（名古屋市中区錦二丁目）
取材者：沖 章枝、三ツ松由有子、浜口美穂
レポート執筆者：浜口美穂



●まちの歴史も竹中の歴史も清須越しから

竹中の歴史は1610年の清須越しから始まり、名古屋城築城の時に武士から宮大工になったことから始まる。明治時代に神戸で工務店を創立したが、発祥の地はここ錦二丁目。1962年に名古屋センタービルを竣工し、名古屋支店もこの地にあった。その後、支店は駅前や広小路にあった時代もあるが、再度ここに入ったのは2012年。錦二丁目まちづくり協議会（まち協）ができた時は、まだ支店は広小路にあった。まち協は再開発プロジェクトもあるのでゼネコンに入ってほしいということで、当初当社は賛助会員であった。

私自身は建築出身なので大学の先生の話聞くのは面白いし、あれこれみんなで言い合うのも学生のように懐かしいと思いながら、アフターファイブの活動に参加していた。支店がここに移り、理事にという推薦があつてからは、いろいろな部会に積極的に参加するようになった。

●センタービルの敷地にウッドデッキを置くまで

マスタープランの取りまとめの勉強会の時に、名古屋大学の方からどうしても都市の木質化（都市木）をやりたいと。名大のグローバルCOEプログラムが絡んでいて、都市計画と農学部が分野を超えた勉強会をやろうということがあり、その一環で進んでいた。

まずはウッドデッキを作ろうと名大から提案があった。大学内ではなく、「地域に出て、学習しながらそこで起こること」というようなプログラムがスタートした。初めは、パークレットといって歩道のアメニティを高めるために木のベンチを置いて休憩スペースにしようとしたが、認可がおりなかった。錦二丁目側はまちづくりの活動として、まちなかに設置を希望。そこでセンタービルの敷地が候補に挙がった。しかしビルの所有者や、管理の問題などもあって、設置にはそれ相当の理由が必要だった。

CSRや環境活動を中心とした企画書を作ったり、当社の存在価値を高めるなどの理由を掲げ、ビルの管理会社に対し管理の仕方など事細かく調整したりしていた。そうこうしているうちに、まち協の理事の滝一之さんがたまたま当社の大阪の役員と友達で、その話をトップダウンで進めてくれた。ビル管理責任者のトップの人がわざわざ名大のベンチの視察や調整をして、ようやく2012年12月にウッドデッキ第1号がセンタービルの敷地に置けるようになった。当社どこの支店を見ても、敷地の中に他人のものが置いてある状態はなく、ここだけだと思う。



名古屋センタービルの敷地に設置されたウッドデッキ3代目。
左写真の一番左が河崎さん。
右写真の parasol は、夏の日差しよけに竹中工務店の予算で設置した parasol

●専門家の連携プレーが技術面を支える

ウッドデッキ1代目は生木を切って作ったので劣化が激しく、2代目はそれなりに整備したものを入れた。3代目は最初から背割りを入れたりヒノキを混ぜたりして、いろいろ工夫をしている。

ウッドデッキ2代目は長者町の歩道拡幅社会実験の木を転用している。歩道拡幅は道路の一部なので縁石を置くのに専門業者がやらないと認可が降りず、当社の関係の専門業者を頼んだが、木は自分たちで置いていった。木はメンテナンスが必要。雪が降るとアスファルトと違って木の上では解けないので、まち協の公共空間デザインプロジェクト長である藤森幹人さん*が一生懸命、雪かきをしていた。半年で撤去しなきゃいけなかったが、いい経験になった。

歩道にベンチを置くのは認可の面でとても難しいが、センタービルの敷地は建物の敷地内なので、問題は何もなかった。歩道上のベンチを設置する場合2.5メートルの有効幅員が必要であるが、今アパホテルの前に設置している大きなベンチも、有効幅員が確保できている。若い頃に南大津通りの歩道の設計に携わったことがあり、その経験も役立っている。設置に関する細かな調整は、道路系の専門家である藤森さんと一緒にやった。

ベンチの図面は錦二丁目に設計事務所を構える大橋俊夫さんが描くが、それだけではわかりにくいから、配置とか立体的な3Dモデルとかは私が担当した。都市木は、建築・道路のプロ、まちの人、県の林務課や豊田森林組合なども加わって、協力し合っている。

* 藤森幹人さん…NPO法人「まちの縁側育くみ隊」理事。錦二丁目に事務所を構えるまちづくりコンサルタント会社「(株)対話計画」代表取締役。

●会社と地域との接点になるフィールド

ウッドデッキ2代目を置いた頃から、何のために木のベンチを置いているかということを社内に情報発信しようと、総務部も巻き込み、会社のCSRの一環で豊田市足助町の山へ。森の健康診断の体験をしたり、豊田森林組合より講義を受けた。木の大切さを知るために、NPO法人 まちの縁側育くみ隊代表で現在錦二丁目エリアマネジメント(株)社長の名畑恵さんをコーディネーターに呼んで社内向けの勉強会もするなど、地域と一緒に環境学習に取り組んでいる。

環境学習ということでは、その他にも、生物多様性を育む緑ということで調査や勉強会をやっている。竹中技術研究所がCOP10のタイミングで、名古屋蝶の飛ぶまちプロジェクトということでチョウの調査や、生き物が来るような緑・花を植える活動をやっていて、私もそれに参加していた。センタービルのウッドデッキの奥にもこの蝶の飛ぶまちプロジェクトの花壇があり、名畑さんもこのエリアのツアーをする時に、ウッドデッキとセットで、「生物多様性に配慮した花壇です」と紹介してくれている。ということでも、ここは地域との接点のフィールドになっている。

当社は「まちづくり総合エンジニアリング会社」ということで、建物だけをつくるのではなく都市におけるまちづくりを考えて取り組もうという目線も育っており、地域の目的と合わせながらの活動になっている。



豊田市足助町の山でCSR活動



ウッドデッキの奥、センタービルの壁面緑化の下に「生物多様性に配慮した花壇」がある(名畑さんが案内する錦二丁目エリアツアーにて)





再生空間合同会社 代表社員
NPO都市の木質化プロジェクト
一級建築士

取材日 : 2023年1月19日
取材場所 : 再生空間合同会社 社内
取材者 : 金井亮介、高橋伸夫、石原淳
レポート執筆者 : 石原淳



● 生い立ちと経歴

三重県出身。小さいころから物作りに興味があり、名古屋大学の工学部建築学科へ進学。その後、岐阜の設計事務所で設計や施工監理の経験を積み一級建築士を取得、錦二丁目で設計事務所を構える。仕事では主に鉄骨の建物を設計することが多いが、名古屋大学で行われている都市の木質化プロジェクトから声がかかり、木材での設計にも関わっている。



設計事例（出典：再生空間合同会社HP）

● 都市の木質化プロジェクトとの関わり

以前の錦二丁目は繊維業の衰退とともに活気がなくなり、駅に近いながらも寂しいところだった。それを何とかするため「錦二丁目まちづくり協議会」として街づくりに関わられていた方からの誘いがあり、錦二丁目の街づくりに関わり始めた。

七番のキッズスペースと本棚の設計をしたり、竹中センタービルやアパホテル前への木製ベンチの設置などをプロジェクトのメンバーと一緒にやっているかたわら、年に3回はメンテナンスを行っており、傷んでいる所のやすり掛けや、のみで削るなどの管理も行っている。アメリカにあるようなデッキスペースがこの町にもあれば活気づくのではないかという思いから、市民が気軽に使えるベンチの設置を計画し、賛同を得て竹中センタービルの前に置かせて頂いている。

また、あいちトリエンナーレの連携事業としても、木製ベンチの設置を行った。



錦二丁目の町中に設置したベンチ。ランチ時などによく利用されている。

●木材を使う上での注意点、工夫したところ

屋外では無垢の木材は4, 5年すると傷んでしまうため、補修や取り換えが必要になる。防腐剤を使用すれば10年ほどはもつものの、子供たちにも安心して使ってほしいとの思いから、触るところは無垢のまま使用し、土台などには毒性の弱い防腐剤を使用している。傷んできた部分は状態によってタワシで擦るなど、いろいろ試しながら工夫している。

プロジェクトには施工経験の無い地域の方も参加されているため、ベンチなどの設計をする時には誰が見ても分かる設計図を描くよう心掛けたり、設計図だけで分からない場合は模型を作って伝えるようにしている。



七番キッズスペースの模型

●都市の木質化プロジェクトに対する想いと今後の展望

森の健康を高めるには木材の利用促進や需要喚起が必要、などと言われることが多いと思うが、自分は設計の人間なので、どちらかというこのプロジェクトで作る喜びを体感している。最近の仕事や大学の建築学科では、図面を引くばかりで物を作っているという実感が薄いように思う。この活動では、設計から完成まで関わることで、物作りの喜びを感じやすい。また、利用する地域の方の声も直に聞くことができる。

仕事の上でも、決まりや規制が多く技術が見えづらくなり、作る喜びから遠ざかっていると思う。住宅などを使う人はどうやって作っているか中身が分からないことが多い。技術がブラックボックスで手が出せないものではなく、使う人が自分で手入れできるような、成り立ちが分かるものを作っていきたい。このプロジェクトに参加して、その想いが一層強くなった。素人でも壁や床に木を張ることは出来る。身近にある木を使って自分で自分の居場所を作ることができれば自然と愛着も湧く。このような取り組みをもっと広げていきたい。

今後、社屋が錦二丁目の事務所から西区庄内通へ引っ越すが、引き続き木質化プロジェクトには関わっていく。仕事では、使用者自身で手を加えたいような建物の設計に取り組んでいきたいと思っている。



大橋さんへの取材風景（2023年1月19日）

浅井さんご一家（雅弘さん、梨紗さん、智裕くん、結仁くん）

ともひろ

ゆうと

雅弘さん：アーティスト。写真を『使った』作品を制作している。都市木ではインパクトを持っている一家として重宝される。

梨紗さん：デザイナー。空間デザイン、グラフィックデザインを手掛ける。現在、錦二丁目エリアマネジメント（株）スタッフ。木材系の施工を大学で実習済み。



取材日：2023年2月6日

取材場所：喫茶七番（名古屋市中区錦二丁目）

取材者：沖 章枝、三ツ松由有子

レポート執筆者：三ツ松由有子

●あいちトリエンナーレ会場となるのが魅力で長者町（錦二丁目）にアトリエを構える

2012年に長者町トランジットビルというアート拠点ができた。それは、建築家とアートキュレーターがビルをリノベーションしたクリエイター長屋のようなもので、入居しないかとの話をいただいた。その頃、私（雅弘さん）は大学院の卒業を控え、今後、どのように活動するかを考えていたところ。2013年に錦二丁目があいちトリエンナーレ（以下あいトリ）会場となることを知っていたので、そこで作品発表できればと錦二丁目アトリエを構え、画家と映像アーティストの仲間2人と一緒に活動を開始した。あいトリで町全体が文化的な匂いを醸し、世界中から様々なアーティストや観客が集うことが魅力。当時、妻も拠点を探しており（まだ結婚はしていない）、同じような理由で錦二丁目アトリエを借りた。

私と2人の仲間は当初、トランジットビルのアトリエでゲリラ展示を行うつもりだったが、あいトリ2013では、コンペ作家として公式展示に出品することができ、街なかのガラス張りショーケースを「疑似アトリエ化する」というテーマで作品を発表した。

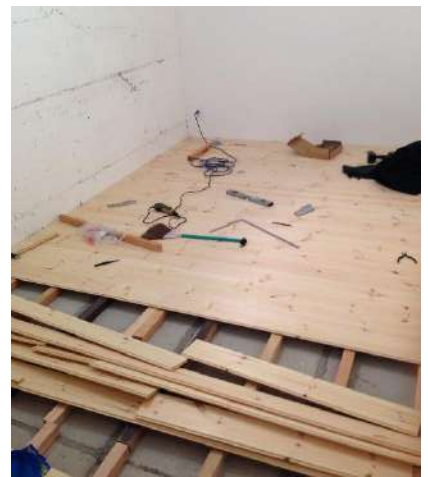
そこで逆に余ってしまった本当のアトリエを作品展示の場所として仲間のアーティストに開放し、ギャラリーとして活用を始めた。使用していく中でコンクリート打ちっぱなしだった床を木の床に張り替える計画が立ち上がり、過去にフローリング施工をしたことがある妻に手伝ってもらいながら、ホームセンターで木材を調達してDIYで床を張った。

●都市木との出会い

この作品づくりで気づいたのが、まさに1年ほどアトリエを構えて居たにもかかわらず、まちの人とあまり接点がなかったこと。そこでメンバーの一人がガラス越しに見える風景を描き写す作品をその疑似アトリエ内で発表し、それをこのまちの他のビルでも増やしていきたいと言い、相談したのが



ショーケースを「疑似アトリエ化する」。窓ガラスにはまちの風景をペインティング



滝さんが注目したアトリエのフローリング

名畑さんだった。名畑さんには滝さんをご紹介いただき、私たちの作品づくりは大きく展開。滝さんは自社ビルだけでなく、他の会社のガラスにもペインティングできるよう多くの社長さんに働きかけてくださった。私たちがまちの中でその後も様々な（移転される問屋ビルでの展覧会開催や、空きビルでの展覧会開催時のインフォメーション部分を木質化した など）展開ができたのは滝さんのおかげである。

あるとき、滝さんがトランジットビルのアトリエを見に来られた。そのとき、木のフローリングに敏感に反応しておっしゃったのが

「床、自分たちで木質化したの？ 言ってくれたら木材あったのに！」

この日を境に、木工と木が好きな若者として滝さんの頭にインプットされた私たちは、何かと声をかけていただくようになった。「都市木の会議があるから来ない？」と言われたのが先か、「木のベンチをつくるから来ない？ お弁当もあるよ！」が先かわからない。自分たちにとってお弁当は魅力だし、活動の背景などよくわからないけど、まちのことだから手伝おう！という感じ。ちょっとよこしまかもしれないが、若いアーティストにとって、自分では行けないお店で食事ができるのは嬉しいこと。それが参加動機と言えなくもない。でも、一緒に食事をしたりする中で次の活動の構想が生まれていったのも事実。あるとき滝さんに食事に連れて行ってもらったとき、あいトリ2016では『アート木質化』をやればいいじゃない！と盛り上がった。私たちはギャグのつもりでロゴをつくってTシャツをこしらえてみたのだが、思いの外ウケが良かったらしく、都市木「アート部門」が誕生！？それが、私たちのあいトリ2016の活動につながっていった。



● 錦二丁目の住民になる、

そして、あいちトリエンナーレ2016

あいトリ2016での都市木の主眼は、まちの日常に木の構造物をたくさん紛れ込ませることだった。つまり、トリエンナーレ公式展示のほとんどはビルの中、来場者は複数の展示会場を巡るため、まちのなかを歩き回ることになる。都市木としては、せっかく錦二丁目に来た人たちが、まち歩きで木を使ったギャラリーに出会ったり、暑い最中なので、涼む場所が素敵な木のベンチだったらいいよね…etc. と、皆でアイデアを出しあった。このとき妻が取り組んだのが「公共空間ベンチ」づくり。そして私と妻と仲間たちの「アート木質化」はまちにギャラリーを増やす試み「都市木ギャラリー」に力を注いだ。「都市木ギャラリー」とは、木のボックス（裏面は収納もできる）を制作し、ビルのショーウィンドウに置かせてもらい、そこに若手アーティストの作品を展示して、お店をギャラリー化するというもの。『都市木質化で森を育てるとともに、若手アーティストも育ててほしい』との想いを込めた企画である。私はデザインや制作はもちろん、店との設置交渉、作品



梨紗さんがデザインし、製作した公共空間ベンチ



都市木ギャラリー（木製ボックスギャラリー）



を展示する若手アーティストの募集、展示の段どり等に奔走して目の回る忙しさだったが、とても充実したあいトリ2016となった。

トリエンナーレの準備をしていた2015年、私たちは結婚し錦二丁目の住人となった。それまでまちの人と話す中で「自分はまちの人じゃないんですよネ」と言う自分がいた。住まなくてもこのまちに愛着は持っていたが、



結婚式も錦二丁目で

やはり住民となると何かが違う。

実現はしていないけれど、木材をこのまちの中で加工できるラボができないかな…と考えたことがある。都市木に関わる前は木を扱っていても、その木が育った山のことを考えたことがなかった。でも（自分は仕事で行けず、妻だけだが）森の健康診断に参加したりして、木のことをもう少し知りたい、木をもっとうまく扱えるようになりたいと思うようになった。知ってる山から木が運ばれてきて、その木を自分で加工したり、施工ができる場がまちの中にあればいいのに…と思う。錦二丁目は地価が高すぎて実現は難しいが、そんな風に夢を描いて楽しみながらやっていきたい。



2022年6月 オープン前の喫茶七番前にて
延藤先生の等身大オブジェは雅弘さんの作品。作品名は「Fake Existence」。通称2.5次元延藤先生！？

高野雅夫さん

名古屋大学大学院環境学研究科教授。木質バイオマスエネルギーやマイクロ水力発電などの再生可能エネルギーの技術開発とそれらの普及を通じた里山再生について農山村をフィールドとして研究を行う。「千年持続学校」（2013年度事例集）の企画運営、「おいでん・さんそんセンター」（2015年度事例集）の移住・定住専門部会長、センターの「ミライの職業訓練校」校長。

取材日：2023年2月16日
取材場所：喫茶七番（名古屋市中区錦二丁目）
取材者：沖 章枝、浜口美穂
レポート執筆者：浜口美穂



●グローバルCOEプログラムとして

まず名古屋大学グローバルCOEプログラムとして「地球学から基礎・臨床環境学への展開」というプログラムが2009年に立ち上がった（2013年に終了）。そこから名大の都市の木質化プロジェクト（都市木）が生まれる。グローバルCOEプログラムは博士課程の5年間のプログラムで、（独）日本学術振興会に申請して通れば補助金がある。博士課程を強化して世界トップレベルの人材を輩出できる大学院をつくらうという意図があった。

プログラムを申請するまでに1年弱かかって議論して、もうダメかなと思ってたら、誰かが「臨床環境学」という言葉をポロっと言った。それまでの環境学は、例えば、汚染物質なら化学の分野の取り組みだし、建築分野の環境学、森林分野の環境学というように、個別分野の中の環境問題をやっていて、でも現実には環境問題というのはそのスキマで起きる。個別では対応できないので、まずは地域の現場の問題からスタートして、それを解決できるような学問的なプログラムということで、臨床環境学をやっていきたいと思いますということになった。要は地域が患者さん。患者さんが病気にかかっているのに直さないと始まらないでしょ。

このグローバルCOEプログラムは環境学研究科と生命農学研究科の共同のプログラムで、森林分野（当時：佐々木康寿教授、山崎真理子准教授）にも入ってもらった。

●研究者もつながり、業界もつながる

実際に何をやるかという議論の中で、多分、佐々木先生から都市木のアイデアが出てきた。よく川上から川下までと言うが、川上は林業、中流は製材業があって、次は流通業、川下に建築屋がある。佐々木先生と山崎先生は木材物理が専門だが、林業が行き詰まっている状況はよくご存知だった。林業が行き詰まっているのを林業の中だけで解決しようとしても無理で、出口をつくらなきゃいけないというのが佐々木先生の発想。そのためには、川上、中流、川下、全部つながらないとダメだよということ、林業をやっている人や、地元の木を使いたいという意欲のある建築家の人など、佐々木先生が声をかけて研究会を始めた。それに僕も入っていた。

そこでいろいろ議論してわかったことは、建築側の人、東海地方の山の木がどういう木で、それがどのようにして現場に来ているのか、木には特徴があるので建築の現場でどう使ったらいいかみたいな認識が全くなかった。ということは、つながらなきゃいけない。なぜつながらないのかということもわかってきて、結局、それぞれ利害が対立しているから。製材屋さんは丸太を安く買いたいけど、林業は高く売りたい。製材と建築の間も同じ。腹の探り合いみたいになってそもそものコミュニケーションが成り立たなかった。でももうそんな時代じゃない。

じゃあ最終的な消費の現場でどこをつないだらいいかという話をしている、戸建住宅だけでなく、都市のビル街の中でも使える方法があるんじゃないかという話になった。一方でグローバルCOEのメンバーに環境学研究科建築学系の村山顕人先生がいて、すでに錦二丁目でもちの縁側育くみ隊の延藤安弘先生たちとまちづくりをしていた。それを知っていた僕が多分村山先生に声をかけたと思う。それで佐々木先生と村山先生がつながった。

まずは研究者がつながって、そこから業界の人たちもつながっていく、というのがこの研究会の狙いだった。

●つながる場としてワークショップをしてみたら・・・

最初は明確に錦二丁目で何かやろうという話ではなかったと思う。初めに錦二丁目でやったワークショップは、川上から川下までみんな集まって、とにかく話そうよ、つながろうよというワークショップだったと思う。村山先生にはまちづくりに何か使えるのではという意図があったかもしれないが…。

僕は基調講演をやり、ファシリテーションは延藤先生が行った。何を話したかは覚えていない（笑）。いつもの話だと思うので、千年持続学の話をして、森林の話をしたと思う。人工林が放置されているという話。つながっていないのが問題なのでそれをつなげないと解決しない。逆にいうと、つなげることによって山の問題と都市の問題を両方一緒に解決しよう、という話をしたと思う。

結局ワークショップをやってみたら結構盛り上がって、そこに長者町の人も参加していたので、それで何かやれるのかもと思ったんじゃないかな。それで延藤先生が錦二丁目のマスタープランに都市木を突っ込んだのでは。

●手作りで理解する学び

グローバルCOEはいろんな分野の人が連携して、博士の学生を育てようというプログラムなので、このように異分野が連携して成果が出たということでは、我々のプログラムの中で都市木はダントツの成果。目に見える成果だと思う。

錦二丁目の都市木の最大の特徴は、みんなで木を使って手作りすること。その学びはすごく大きい。業者がやるのはビジネスで、ビルができてみてこんなに木が使ってあっていいねで、それで終わり。でもここではみんなで手作りするから、それぞれの人が感性レベルで、体を動かして理解する。それが一番のポイントだと思う。



やすとし 佐々木康寿さん・山崎真理子さん

佐々木康寿さん：名古屋大学大学院生命農学研究科教授。農学博士。専門は木材強度学、木質環境設計学。

山崎真理子さん：名古屋大学大学院生命農学研究科教授。博士（農学）・博士（工学）。専門は木質環境学、木材工学、林産学。

取材日：2023年2月8日

取材場所：名古屋大学理農館（愛知県名古屋市）

取材者：洲崎燈子

レポート執筆者：洲崎燈子



佐々木康寿さん



山崎真理子さん

●都市の木質化プロジェクトの立ち上げ

佐々木：

大学の研究者の学問分野というのはたこつぼのように狭く、隣の研究室の先生が何をやっているのかも知らない。これでは優秀な人材は輩出できない。文科省が、「学問分野の壁を取り払い、一つの目標に向かって一緒に進むということをしなさい」と言うようになった。名大では2009年頃からその提言を受けた取組が始まり、私たちは木材利用をテーマとすることにした。

川上～川中～川下というロケーションの中で、木材利用は川中の問題。私たちはこれまで川上や川下のことを考えてこなかった。ふと「木って山から出て来るよな」「使うのは川下だな」ということを自覚し、日本の山はおかしいのではないか？と思った。木は出てこない。間伐してもほったらかしで、雨が降ると山が崩れてしまう。当初は、こんなに資源があるのだから、木材建築をもっと造ればいいのでは、と思っていた。そこで2009年に、森から建築の研究をする「都市の木質化プロジェクト（以下都市木）」を立ち上げて、山崎先生らに声をかけた。森と町を結び、同時に元気づけるプロジェクトにしたいと思った。木がどこに使えるかとか森の問題について、一年近くブレインストーミングした。

●錦二丁目まちづくり協議会との出会い

佐々木：

都市木のメンバーに入っていた都市計画の村山顕人先生に、「できれば都市部に森をつくり、国産材を使った木造建築を都市部に普及させたい」と伝えたら、「自分は錦二丁目のまちづくりに関わっているんで、そこで話したらどうか」と言われた。そこで錦二丁目まちづくり協議会（以下まち協）に行き、「山から木を持ってきて使いたい。たくさんの木を使えば二酸化炭素固定の効果がある」と話した。

まち協の皆さんはまちづくりを推進したい、治安や風紀の悪化を食い止めたい、若い人、外の人に来てほしいと考えていた。そこで、年2回行っているイベントで、木を使って何かしようと考え、ウッドデッキを思いついた。



山崎：

村山先生がサンフランシスコで、車道の上に公園をつくったパークレットの事例を教えてください。長者町の車道は積み下ろしに便利よう広がっていて一方通行だが、今はそんなに広い必要がない。外から来た人の車が逆走し、危険でもある。

佐々木：

地元は歩道を広げたいとずっと思っていた。そこで国産材で歩道を拡幅することを思いついた。木の人工乾燥は莫大なエネルギーを使うので、大きい材のまま外で使い、3～5年かけて天然乾燥させるといい、腐ったり汚れたら取り替えるといい、そんな木づかいの素人の非常識な提案を、錦二丁目の皆さんは受け入れてくれた。都市木のメンバーが設計を行い、豊田市森林組合の山田さんが木材を調達してくれた。

●錦二丁目まちづくり協議会のすごさ

佐々木：

錦二丁目の人々は今は独立し、自分たちの考え方で都市木を進めていけている。素晴らしいし、立派だと思う。木工作品は、まち協と都市木の有志メンバーから成る「まちメンテ」で、サンドペーパーとほうき、ちりとり持参で月一回、夜チェックしている。だから状態がいい。こういうことはなかなかできない。

まち協が「まちにこれがほしい、木でつくろう」と言うと、山田さんが「行き先がなくて困っている木が二束三文で提供できるので使って」と応じてくれ、その木の寸法ありきで製品をつくることもしている。まち協のひとたちにとって木は、自分たちでネジやドライバーで加工でき、よってたかって作業できる素材。半日や一日で喜びを味わえる。そのことで人と人を結びつける、まちづくりの潜在的力、良いツール、媒体になっている。彼らの活動が今も継続しているのはすごい。

名大の学問分野は11あり、こちらの当たり前が分野が違うと当たり前でないので、彼らには学ぶことが多い。

錦二丁目の人たちの特徴は、

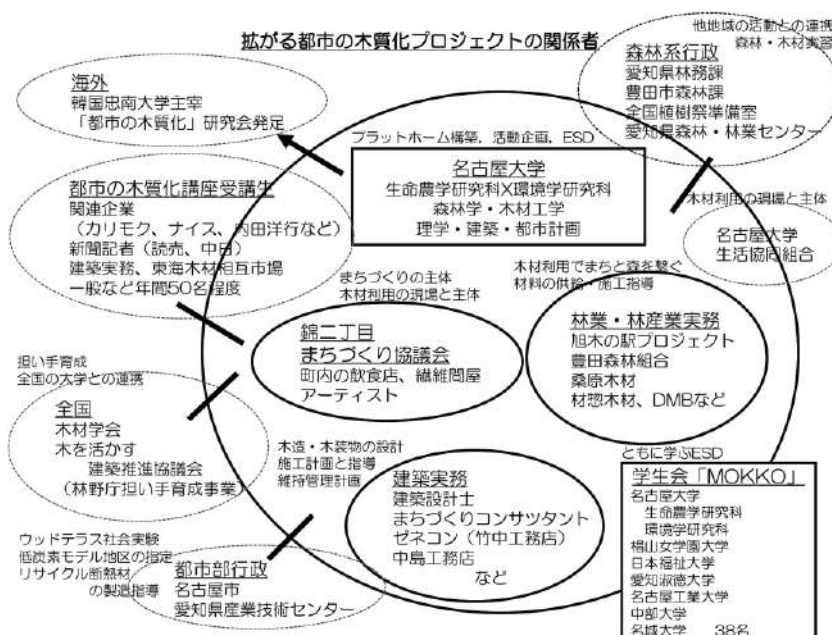
- ①自営業の人たちであるところ。2～3代目で商売が儲からなくなり、危機感を潜在的に持っていた。
- ②考える力を持っている。違う町の人に言ってもこうは届かない。日本の森の状況、木を使う意味を理解している。自分たちの問題とリンクさせ、いいまちにすることに結びつけた。

山崎：

2014年にまち協の滝さんにお話を聞いた。環境問題について何をしたいか分からなかったが、木という素材を使うことになったのが良かった、ごみ拾いもいいが楽しくない、ガラス張りの部屋で木工をしてると人が入ってくるのが良かったと話されていた。

木を使うとほしいものがすぐつくれる、造形に関われる。現代社会がアウトソーシングで手放したものが得られる。

まち協のキーマンは滝さんや河崎さんだと思う。滝さんはすごい。よそで同じ話をしてもこのようには通らない。飲み込みが早い。延藤先生を連れてきている時点ですごい。



佐々木：

延藤先生のまいた種はすごい。まち協は月一で会をやり、始終新しい人を呼んでいる。儲け話があると思って来て、当てが外れて離れる人もいる。この活動は完全に根付いている。

山側から見ると、住宅で使われている木は画一的で、3×4×6m。デッキは1mでも2mでも使える。彼らは公共空間を何とかしたいと考えている。ふつう、目標を定めて達成しないと、組織に所属する人は減る。ここは一年に一つ、何かを木質化している。たとえばおもてなしベンチ、ミツバチの巣箱の床材、アパレル会社の内装、子どもによるカウンターづくり、ユニット家具など。木のいいところは、見える化できることである。

都市木はもともと、森と町の課題を連携して解決することをめざしていた。今後は元々の問題に向き合うフェーズに向かうと良いと思う。たとえば、木造住宅を増やすとか。

●都市の木質化を進めるために

佐々木：

都市の木質化は間口が広い問題。当初は「川下が木を使わないのがいけない」と思っていた。以前はゼネコンで木を使っているところはなかった。しかし今は大林組も手がけている。川下の意識は高まっている。一方、山からは木が出てこない。木を出しさえすれば川下は使える。彼らが「内材は使い勝手が悪いから外材でいい」と輸入材に走るのを危惧している。

山崎：

山側の人は木の行き先に関心がない。見届けてつながってほしい。川下の人は「こんなものをつくりたい」と夢語りをする。しかし山側は10年前の課題をまだ語っている。分析がない。農学部の学生も山側に就職しない。山側の人には、木材利用、木材建築など、木の使い手と接点を持ってほしい。

川中の問題は、歩留まりが悪いこと。山側にお金を返せない。長者町の会議でもそういった話題が出ている。「ここで満足しないで」と言いたい。

大学は担い手育成事業。学生が来ると皆喜ぶが、学生の人生の次のステージにつながるかどうかはまだ課題である。学生たちを安い労働力としてとらえてはいけない。まち協には彼らのアクティブ・ラーニングの場になってほしい。都市木を学生の就職や起業につなげてほしい。専門外の学生にも関わってもらえるといい。在学中に友だち同士になると後々もつながりが続く。学生グループのMOKKOもまだまだだと思う。

岡崎では今年、市産材利用の学生コンペをやろうとしている。市役所が依頼した。

●木材利用という市場（文化）を開発するために

山崎：

三宅秀道氏という経済学者が、問題開発と認知開発（以上は発生学）、技術開発と環境開発（以上は育成学）の四つが揃わないと市場はつくられないと説いている。次ページの図のウォシュレットの事例を参考にして頂きたい。同氏は、日本人は技術開発ばかりやる傾向があると言っている。そのため、実際に物ができても、開発にかかったコストがペイされないという問題が起きてしまう。本当は問題開発、環境開発、認知開発もやらないといけない。

人は「何かをしなくてははいけない」ということではお金を払わないが、幸せだとお金を払う。木材利用についても、日本人は不燃材をつくるとか、防腐剤をつくるという技術開発ばかりを進める傾向があるが、木材を使って幸せだと一般の人が思えないと、木材利用は進まない。

発生学からスタートすると育成学が変わる。これは、錦二丁目のオリジナルなところだと思う。スギダラプロジェクト*と似ている。

*スギダラプロジェクト…戦後の植林によって杉だらけになってしまった日本の山林をやっかいものの扱いせず、材木としての杉の魅力をきちんと評価し、産地や加工者、流通、デザイン、販売など杉を取り囲むシステムを結びつけることで、杉をもっと積極的に使っていこうじゃないか！ という運動

（日本全国スギダラ倶楽部HPより）



トイレでお尻を洗いたい！ 温水器とポンプをつくろう！



社会に良さを広めよう！ トイレに電源をつなごう！



- ・市民にとって、「木材」を選択するモチベーションは？
- ・環境優位性などの意義は理解してもらえが、行動に繋げるための、日々小さなことからできる取り組みがない
- ・木材利用は、一世一代的で、非日常（ファンを育てにくい）
- ・選んでもらえば分かる幸せは、選ばない限り分からない
- ・担い手の獲得：全産業界で熾烈な競争

- ・木材利用をしたくなるモチベーションの創出と維持
- ・日々、小さなことからできる取り組みをセッティング
- ・「その時」に木材を選んでももらうために、木材の提供する幸せを知っておいてもらうこと
- ・若者が就きたいと思える産業に→夢と希望

佐々木：

どこでも「木造がいい」という話になるけど、とにかく木が売ればいいといった、経済活性化の話、技術開発の話になってしまう。学術の世界でも同じ。木は使ってくれる人がいてなんぼである。閉鎖社会である学会で、自分たちはプロだと認識し、「木は素晴らしい」と言い合っていてもしようがない。誰がどこで木を使うのかを考え、他流試合をしないとイケない。

山崎：

日本人は一生懸命やっているのにだめだと思う。たこつぼの中にいるから、問題解決に向けて進めない。ヨーロッパはグリーンビルディング認証や雇用、木造建築の寿命を延ばす手法など、さまざまな取組が進んでいる。木材はSDG'sの真ん中の輪に当たる。良い環境を守り、先を見て、木材利用をビジネスにすることができないだろうか。



(この項に掲載したスライドはいずれも山崎真理子氏作成)

山田政和さん

豊田森林組合総務課加工グループに昨年まで所属。木材や自然の魅力を街の人に伝えたいと木の玩具作りや生木を電動工具無しで木材加工するグリーンウッドワークという活動も行っている。

取材日：2023年1月

取材場所：喫茶七番 & スペース七番（名古屋市中区錦二丁目）

取材者：沖 章枝、近藤 朗、浜口美穂、三ツ松由有子

レポート執筆者：三ツ松由有子



「とよたでつながるローカルメディア縁側」より

●都市の木質化プロジェクトと関わるいきさつは？

2010年だったと記憶している。名古屋大学の佐々木先生、山崎先生が豊田森林組合に来られて、「名古屋大学都市の木質化プロジェクト（以下、都市木）を立ち上げるから協力してほしい」との話があり、加工グループにいた自分が関わることになった。その頃の自分の仕事は、伐り出した木材が土木資材として使われる以外、どこでどう使われているのか全くわからなかった。そうした中、2011年頃より錦二丁目の都市木ミーティングにも参加するようになり、木を使ってくれる人々とダイレクトにつながった。これは自分にとって非常に大きな出来事だった。会議の中で錦二丁目の皆さんがウッドデッキを設置したい！ベンチを作りたい！と話し合う。それを受け、実際に木材を調達して錦二丁目へ運び、ときにプロだけで、ときに町の方々と一緒にカタチにするのである。都市木のメンバーには多彩な人々が関わり、その中には設計士さんもある。図面は設計士さんが描くが、木については僕の方がよく知っていることもあり、強度や加工しやすさを考え、材の選定や使い方について提案するようになった。より良いモノづくりのために彼らは僕の提案に耳を傾けてくれ、共にモノづくりを楽しむ仲間として信頼関係ができていった。その喜びと木を使ってくれる人々の顔が見える嬉しさ、これらが自分がずっと都市木に関わり続けるモチベーションとなったと思う。



喫茶七番にてお話を伺う

●都市木で世界が広がった！

2013年5月、山崎先生に誘っていただきドイツの国際木工林業機械見本市（リグナハノーバー）視察に同行した。そこで見た林業と木材加工の世界は日本と全く違っていった。ドイツでは、自社工場で集成材を作る工務店があるし、老夫婦が自分の山の木を伐って製材販売する半農半林スタイルもあった。そして、それぞれの業態・規模に合わせたオリジナリティ溢れる機械があり、人も機械も実にバラエティに富んでいる。私はそのことに大きな衝撃を受けた。



ドイツ木工林業機械見本市視察にて

そして同年夏～秋、錦二丁目（長者町）があいちトリエンナーレ会場の一つとなり、そことの関わりが、ドイツでの衝撃と学びを私の中で融合させてくれた。

錦二丁目会場では、木の「おもてなしベンチ」づくり、ビジターセンター&スタンドカフェ施設の木装化(木材料)を担当。このビジターセンター&スタンドカフェは、カフェそのものがアーティスト作品というユニークなもの。夜な夜な出展アーティストたちが集い、非常に楽しい交流の場となっていた。僕もお酒を飲みながらアーティストさんと仲良くなったが、木の香りとぬくもり溢れる施設はとても好評で嬉しかった。また、彼らの自由な発想に触れ、ドイツで目から鱗の「な～んだ、決まった通りってないんだ！」との想いと重なり、モノづくりの探究は枠にとらわれなくて良いのだと思えるようになった。



おもてなしベンチの制作



隣で一緒にビールを飲んでる人に「この落書きかわいいですね」と言ったら「これ僕が書いたんですよ」と。それが現代アーティスト奈良美智さんだった

●山田さんにとっての都市の木質化プロジェクトは？

このように、僕をどんどん広い世界へ引っ張り出してくれるのが、錦二丁目・都市の木質化プロジェクトであり、木が好きな仲間、一緒に木材を使ってくれる仲間がいるかけがえのない場所である。2013年以降、月1の定例会にはほぼ欠かさず出席し、木工だけでなく、錦二丁目の皆さんが森や山を知る「森の健康診断」、長者町あびす祭りでの薪割り体験や木を使ったワークショップ、木育や木工に取り組む都市木・大学生サークルのサポート、竹中工務店新入社員の環境・SDG s 研修の受入れと、実に様々な取り組みに携わってきた。そうした10年以上の積み重ねがあり、ようやく「木を使いたい！」という人が増えてきたと実感するところまできたが、残念ながら、豊田森林組合としての錦二丁目・都市木との関わりは、2022年で終了となった。

僕にとってはライフワークともなったこの活動。若い人たちへの木工技術指導や、まちの人に森で過ごす楽しさを伝える取り組みなど、まだまだできることはたくさんある。花開く手ごたえがあるのに閉じてしまうのはもったいない。これからも関わり続けていきたいと思っている。



2015年、2代目ストリートウッドデッキを制作



左写真は豊田市旭地区での森の健康診断。右写真は長者町「あびす祭り」の薪割り体験。ハイヒールを履いた女性が薪割りをするのも、錦二丁目という都会のイベントならではの。両イベントとも、山側の人々をコーディネートし、実働を兼ねる山田さんの存在なしには実現できなかった

高山治朗さん



旭木の駅プロジェクト実行委員会 委員長
あさひ薪研 メンバー、あさひ根っ子の会 事務局
太田町内会長 豊田森林組合 理事

取材日 : 2023年1月19日
取材場所 : 高山さん ご自宅
取材者 : 石原淳、金井亮介、高橋伸夫
レポート執筆者 : 石原淳

●都市の木質化プロジェクトを語る前に

高山治朗さんは、過去の山村再生担い手づくり事例集（2013年～2016年）に2度登場され、今回で3度目となる。おそらく、これまでの事例集の取材の中で、最も多く登場された方だ。私は、取材者に選任され、初めてお会いすることになったが、間接的には初めてではなかった。なぜなら、今から5年前の2017年12月、あさひ森の健康診断報告会の際、司会をされていたのが高山さんであったからだ。大変ダンディーな声と完璧な司会進行に圧倒されたのを覚えている。取材のアポイントの電話では気づかなかったが、ご自宅でお会いした際に記憶が蘇った。



あさひ森の健康診断報告会の様子（2017年12月16日）

さて、高山さんが人生をかけて進める「旭木の駅プロジェクト」について、もう一度おさらいしたい。旭木の駅プロジェクトは、放置された間伐材を地域通貨の導入により搬出することで、地域の活性化を図る目的として2011年に発足した。今年で12年目を迎え、地域経済の活性化や森林再生・土砂災害の防止といったハード面の効果にとどまらず、子どもの林育の推進・担い手の育成、定住者の新たな仕事の創出、住民の新たな活躍の場を創出している。

●都市の木質化プロジェクトとの関わり

名古屋大学が立ち上げた「都市の木質化プロジェクト」のメンバーである西川早人氏（旭木の駅プロジェクト、矢森協代表）の呼びかけにより、2017年から2年間、名古屋の長者町繊維街のゑびす祭りで、薪割体験を開催した。初年度は薪割担当を2人置いたが、市民に大盛況で休憩が持てなかった。翌年は、3人に増員したにもかかわらず、やはり休憩を取らせてもらえなかった。特に女性と子どもに人気で、女性はスカート姿でも平気で体験する。ノリが悪いのは男性だ。

木の駅プロジェクトで搬出される材は2mである。この2m材で何ができるかを木質化プロジェクトと検討し、ベンチ等への活用が考案された。2m材は、DIY用として都合がよく、ベンチや板材（壁等）として活用される。

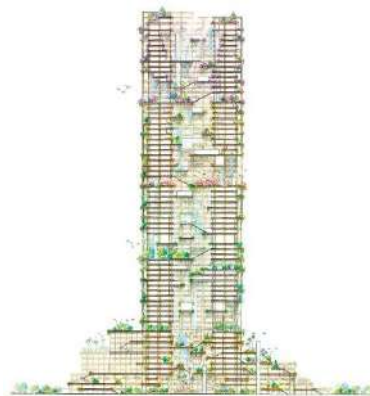


ゑびす祭り・薪割体験風景（出典：長者町ゑびす祭りHP）

●都市の木質化プロジェクトに対する想い

本当の木質化を進めるためには、オーストラリアで建築が進められる木造ハイブリッド構造のように、ビル単位で木材（集成材）を活用する必要がある。現在の日本の木質化は、ベンチや椅子といった数本単位を扱う（お金にならない）動きである。

木材の耐用年数は数百年単位であり、セメントは数十年である。木材に対する価値観を変えることが第一である。その足掛かりとして、この「都市の木質化プロジェクト」は、その価値観を変えるスタートラインに立ったと考えている。



（出典：株式会社大林組HP）

●都市の木質化が進まない原因と解決手法

①都市の木質化が進まないのは、山林事業主、森林組合、それらの関係者が“補助金100%漬け”になっていることにも原因がある。補助金頼みになると、自ら山を作ろうとしない。補助金に頼らなくても林業が成り立つ仕組みが必要である。解決手法は難しいが、その糸口として、木質化プロジェクトの推進、木育の推進等が含まれると思う。

②我が国の都市の木質化を円滑に進めるには

なぜ、日本で木質化が進まないのか、国を挙げて真剣に考える必要がある。美しい、優しい、体に良い、手触りがいい、子どもの教育に良い等、それらだけでは木質化は進まない。林業従事者が儲からないからだ。真の木質化を進めるためには、流通経路を確立する必要がある。農産物にしても工業製品にしても、流通経路が確立されているから成り立っている。この地域（矢作川流域圏）では、森林組合等生産者の体制はある程度整っているが、まだまだ消費の需要開拓や、それに応えるための加工・流通部門の体制が不足していると思う。



高山さんへの取材風景（2023年1月19日）

西川早人さん・戸田友介さん

旭木の駅プロジェクト事務局。

西川早人さん：矢作川水系森林ボランティア協議会代表。

戸田友介さん：株式会社M-easy代表取締役、株式会社あんじゃない代表取締役、小渡・小原販売店戸田新聞店代表、一般社団法人里モビニティ代表理事、株式会社きく結び取締役顧問、あさひ新研事務局長。



西川早人さん



戸田友介さん

取材日：2023年2月7日

取材場所：つくラッセル（愛知県豊田市）

取材者：洲崎燈子

レポート執筆者：洲崎燈子

●旭木の駅プロジェクトについて

「木の駅プロジェクト」は、伐り置き間伐により山に放置されている材を山から出し、土場まで運べば、1トン（軽トラ約2杯分）で6,000円相当の地域通貨「モリ券」が対価として得られるという仕組み。2009年に岐阜県恵那市で始まり、現在、全国で74カ所に広がっている（2019年末時点）。

愛知県豊田市旭地区では2011年3月、全国で3番目に、まずは社会実験として「旭木の駅プロジェクト」（以下、木の駅。「山村再生担い手づくり事例集」Ⅰ、Ⅳ参照）の取組を始めた。西川さんと戸田さんは同プロジェクトの事務局を務めている。

●錦二丁目まちづくり協議会との出会い

2013年に名大の高野先生が、都市の木質化プロジェクト（以下、都市木）を進める佐々木先生に引き合わせてくれて「一緒に何かやれるといいね」という話をした。木の駅は都市木を通じて、錦二丁目まちづくり協議会（以下、まち協）に関わるようになった。最初は、「ビルの屋上に置いたミツバチの巣箱が、夏に暑くなりすぎるので、巣箱の下に敷く板を提供してほしい」という依頼に応じた時だった。



木の駅で出た木材を豊田市足助地区で製材し、名大に持って行って、学生や院生の皆さんが台をつくる作業をした。

2013年のあいちトリエンナーレでは、豊田森林組合の山田さんの手配で、豊田の木材が有償で使われた。大きな木を測って出した。木の駅の材を提供したこともあった。

● 2つのプロジェクトの交流会

木材利用は、単なる資本主義のしくみで進めるだけではだめだと思っている。佐々木先生と、同じく都市の木質化プロジェクトメンバーの山崎先生に、「山の現場を見てほしい、山を健全な状態にするため応援してほしい」と話した。そして、2014年から年に1回、豊田市旭地区で、木の駅メンバーとまち協メンバーの交流会が行われるようになった。毎回必ず旭の温泉旅館に1泊して、市民参加型の人工林調査、森の健康診断を行うことにした。まち協のメンバーは雪が積もった、地元の人でも「こんな日に山には入らない」とあきらめるような日に山に入り、雪景色に魅了され、尻餅をついて泥だらけになって大喜びした。交流会から帰ってきた彼らを見て、名畑さんは「ぎすぎすした商売人が可愛くなって帰ってきました（笑）」と言った（「矢作川流域圏懇談会10年誌」より）。

他に森林組合の製材作業や、林業機械の見学などを実施した。2016年にはコシアブラなどの山菜を採って、お寺シェアハウスの福蔵寺で天ぷらをつくって食べたりもした。2017年には「ガキ大将養成講座」という企画で山中につくられた、ツリーハウスとフィールドアスレチックのある「さくら村」の落成式にも行った。木の駅プロジェクト実行委員長の高山さんが栽培している自然薯を皆にプレゼントしたこともあった。農家民宿ちんちゃん亭（「流域圏担い手づくり事例集Ⅰ」取材先）や、有害鳥獣として駆除された動物の食肉加工を行う足助の「山恵」（「流域圏担い手づくり事例集Ⅰ」取材先）の見学なども行った。



温泉旅館「とうふや」での
最初の交流会（2014年12月6日）



雪の中を森の健診体験へ
（2014年12月7日）



さくら村の見学
（2016年3月12日）

2015年の長者町ふびす祭りでは、薪づくり研究会*が薪割り体験をするブースを出店し、好評を博した。体験希望者が長い行列をつくって、スタッフは休む暇がなかった。そもそも皆が買い物に来るお祭りなので、体験ブースは新鮮に映ったようだ。当初は無料だったが、後から体験料を100円取るようにした。チラシをつくって、木の駅や都市木を広報した。

これらの交流は残念ながら、コロナ禍の広がった2020年度以降は途絶えている。

● 2つのプロジェクトのこれから…

木の駅とまち協の交流が重ねられていく中で、旭に長者町の森をつくろうという話も出た。その森から出た間伐材をこちらで製材し、まちなかで皆がDIYをやって活用できればと考えていた。ただそのためには、まちなかに工房的なスペース・拠点があって人が常駐していないと難しい。そういう人がいなかったため、実現しなかった。

現在もまち協の会議は続いており、単発の交流ツアーを行うことはできるが、今後、日常的に旭と長者町のメンバーがつながるのは難しいのではないかと感じている。コロナ禍で人が集うことが制限されるようになってしまった。それでも続いていた企画は残っているが、そうでなかった企画は感覚が忘れられてしまったという印象を受けている。地元のお祭りですら存続が難しくなっている。

長者町との交流については、今後活動していく中でタイミングが合い、win-winの関係でコラボでできることがあればやれるといいと思う。

* 薪づくり研究会…木の駅での間伐材の販売方法は採算が合わないため、間伐材を薪にして販売する取組

鍋田拓哉さん

愛知県農林基盤局 森林保全課
森と緑づくり推進室 森林育成グループ 室長補佐

取材日 : 2023年1月18日
取材場所: 愛知県農林基盤局森林保全課
取材者 : 近藤朗 浜口美穂 三ツ松由有子 沖章枝
レポート執筆者 : 沖章枝



●「錦二丁目まちづくり協議会・都市の木質化プロジェクト（錦二丁目・都市木）」出会いの糸口
中区錦二丁目（「長者町」呼ばれる地域）があいちトリエンナーレのまちなか会場に選定されていて、2010年、2013年とさまざまな取り組みをされていることは知っていた。林務課に所属していた2016年には「あいちトリエンナーレ2016」に関わらせていただいた。愛知県は主催団体の一つになっていたが、林務課は会場周辺のところで予算をつけて独自の取り組みをした。

きっかけは、2014年9月「歩道拡幅社会実験」が新聞報道されたのを見られた当時の森岡仙太副知事（2014年4月～2020年3月在任）が「一度見てくるように」と言われたことだった。

●「錦二丁目・都市木」に参加のお誘いを受けて

竹中工務店の河崎さんが会社として木造建築を進めていくという方針もあり、県庁へ営業に来られた。その折、「ウッドデッキ」を竹中工務店のセンタービル敷地に設置されていることや「錦二丁目・都市木」に参加されていることもあって、「一度来られませんか」とお誘いをいただいた。

街なかで木を使う取り組みが他にはないことであり、林務課として木材利用のPRができる何かがないかと考えていた時でもあり、職場から徒歩で行ける距離でもあることから顔を出すようになった。定例会は毎月一回現地で集まって、提案や活動方針、情報共有がされてきた。新型コロナ感染でリモート併用のときもあったが続いている。今も個人的に参加している。

●“全国都市緑化あいちフェア ～花と緑の夢あいち2015～”に木の休憩施設を設置

愛・地球博記念公園（モリコロパーク）で開催の緑化フェア担当は他の部署であったが、当時、林務課として大勢の人の目にふれる機会に木材利用をPRするものを展示したいことや、次年度に予定されている「あいちトリエンナーレ2016」の取り組みも見据えて予算をつけ参加させていただいた。

木の休憩施設と言ってもありきたりの施設ではなく、面白いデザインのものにしたいと考えた。「錦二丁目・都市木」のメンバーには設計・建築の専門家、アーティストもおられた。メンバー以外にも名古屋大学都市の木質化プロジェクトの設計・建築の専門家にも声をかけた。



ウッドデッキなど一部の施設は現地でセルフビルド製作した。「錦二丁目・都市木」の人々に声をかけてモリコロパークに来ていただいてみんなで協力して携わっていただいた。

これまで緑化フェアなど催事で使用した木材は終了後撤去し処分しなくてはならなかった。廃棄物として処理をすることが忍びなくあちこちに声をかけて引き取っていただいていた。

都市の木質化プロジェクトの二代目ストリートウッドデッキの更新（2015年12月）は、緑化フェアで使用した木材を再利用した。

●「あいちトリエンナーレ2016」に、林務課独自に予算をつけて木製の休憩施設等を設置

もともと「まちなか会場」の一つに長者町・錦二丁目が指定されていて、街なかで木を使う試みは既に2010年2013年と2回の実績もあるので、一緒にやらせていただくという形だった。愛知県が主催団体の一つになっていてコラボがしやすく、初めての民間出身の森岡副知事が木材利用に積極的な姿勢でおられた。

大勢の人が来られる機会なので、トリエンナーレの会場周辺を歩くと木の施設が目につくようにした。何処に、どんなデザインのものを設置するか、質感、大きさなどすべて「錦二丁目・都市木」で協議しアイデアを出しあって決めた。設計費や製作費は林務課が費用負担をしたが、「長いベンチ」はセルフビルドでまちの人に協力いただいて製作した。具体的には、以下のものを設置した。

- △公共空間ベンチ・・・公道上に木のベンチを10基ほど設置。朽ちて撤去したものもあるが、いくつか残っている。（錦二丁目 都市の木質化マップ〈以下、マップ〉D）
- △都市木ギャラリー・・・台車に載せて運べる大きさの四角い木の箱に美術作品を展示して、どこでもギャラリーになる。（マップE）
- △長いベンチ・・・ビル横の細長い敷地があったのでベンチを設置。ビルが壊されて残っていない。（マップAの東向い側）
- △水船（和舟）・・・セブンイレブンの駐車場に設置。（マップGの南）
暑い時期なので足湯の代わりに水に足をつけて涼んでもらうようにした。
気候が涼しくなったら水は抜いて木の丸い球を入れた。
トリエンナーレのスタッフ（テクニカルマネージャー）に杉板で和舟を作れるアーティストの小川智彦さんがいて製作。終了後に撤去。
- △駐車場犬矢来・・・ビルの間の駐車場の壁に角材を縦に並べたもの。
車をとめた人の目に必ず留まる。終了後に撤去。
- △インフォメーション・センターの壁面と机・椅子などの木製部分を林務課が担当した。
長者町通り沿い。（マップ一番南のH付近）



インフォメーション・センター前（マップ一番南のH付近）





駐車場犬矢来



水船（マップGの南）



長いベンチ（ビルが壊され、残っていない）（マップAの東向かい側）

●公道上に常設物を設置

公道上に何かを設置する場合は、区役所、警察署に申請をして認可を得なくてはならない。常設ということの手続きのハードルは結構高かった。関係機関の協力もあり比較的スムーズに進んだかもしれない。現在常設のベンチ等々の管理は「錦二丁目・都市木」に継承されている。

●その後

2016年ごろまで都市の木質化のような取り組みがなく黎明期だったので集中して力を注いだ部分がある。現在は錦二丁目に対しては県が支援しているわけではないけれど、一宮駅前の休憩施設や岡崎市中心の籠田公園周辺など、様々な地域で地元の木を使っていこうというコンセプトが広がっており、錦二丁目の活動が影響しているのではないかと考えている。

木材利用だけでなく森林・森づくりに結びついたものでなくては駄目だと思っている。こうした取り組みを県がどうフォローして支えるかという段階になってきていると考える。

（「あいちトリエンナーレ2016」後の2017年春、鍋田さんは林務課の木材利用担当から別の部署へ異動したが、現在も都市の木質化に関する様々な活動に参加している）



愛知県林務課あいちの木活用推進室の来客用テーブルと椅子

3.愛知県のプロジェクトへの関わりと展開

～ 都市と森を繋ぐために ～

取材対象者：愛知県森林保全課 森と緑づくり推進室 鍋田拓哉 室長補佐
同 林務課 あいちの木活用推進室 高嶋修 室長補佐、柘植健太 主査

取材日：2023年1月18日

場取材所：愛知県庁西庁舎内（名古屋市中区）

取材者：近藤朗、浜口美穂、三ツ松由有子、沖章枝

レポート執筆者：近藤 朗

名畑さんからは、都市木において愛知県・鍋田さんの関わりがとても重要であったと言われました。一つには、ロールモデルとしての錦二丁目からこれにとどまらず、さらに広がっていくための役割も託されているのだと、私は受け取りました。このため鍋田さんの取材時には、現在の林務課担当者にも同席いただき、今後の木材利用促進に向けての取組み、方針などを伺いました。



柘植さん 高嶋さん 鍋田さん

あの頃の錦二丁目は、レアなモデルケースとして捉えており、その後愛知県は県内で木材利用促進を広げていくための各種施策を模索し展開してきたという。2019年には、PR効果の高い民間施設などの木材利用に対して補助を行う「木の香る都市（まち）づくり事業」を始めており、さらに「愛知県木材利用促進条例」を2022年4月に施行、あわせて「木材利用の促進に関する基本計画」も策定された。

今回の取材で分厚い「あいちの木づくり事例集」を提供いただいたが、ここでは県内104の事例が紹介されている。唯一事例といってよかった錦二丁目・都市木から、今では良好な事例が随分と広がり増えてきたという状況という。ただしこれが満足な森林管理を進めるための水準かといえ、さらに十分検討していく必要があるのだろう。

山村には、木材利用の促進だけでなく、過疎化、担い手の確保など多岐にわたる課題も抱えているのが現状である。そのことも下流域（川下）である都市市民は知らなければならないと思う。そういった意味で錦二丁目がかねてより森の健康診断や森林見学に参加したり、2023年度からは原点に立ち返り「山との交流」を再開させる（コロナ禍で中断）と宣言されたのは非常に興味深く、重要な視点だと感じた。

愛知県林務課、森林保全課への取材からは、現在では錦二丁目と直接的な関わり合いを持っていないものの、木材利用を広く県下で展開していきたいという覚悟を感じた。さらには県有林などを通して森林保全をどのように進めていくのかが県の課題となろう。あいち木づかいブックでは、人工林の手入れや森林の生物多様性保全まで言及している。

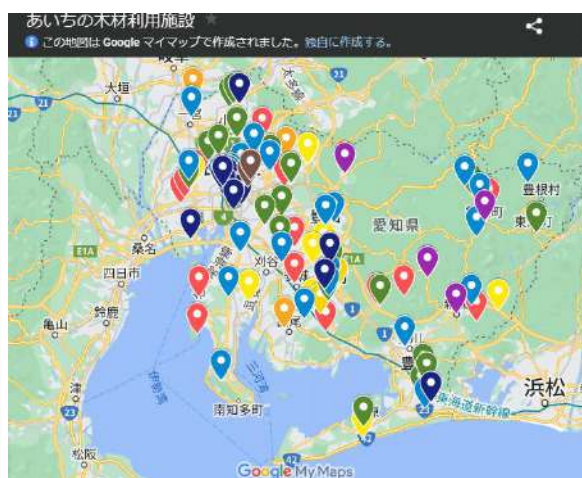
元より名古屋大学が提唱した都市の木質化プロジェクトの目的は、「森林を持続可能なものにする」であった。



あいちの木材利用施設 事例集



愛知県農林基盤局林務部林務課
あいちの木活用推進室
2022年12月改定



岡崎市額田センター 「こもればかん」

岡崎市榑山町字山ノ神21-1

構造／
鉄筋コンクリート造一部木造平屋建て（市民交流棟）
鉄筋コンクリート造2階建て（行政棟）
延床面積／1975.77㎡ 竣工／2017年12月
木材使用量／189.71㎡（うち岡崎市産材148.12㎡）
施工／岡崎市 設計／株式会社青島設計
施工／小原・丸井特定建設工事共同企業体
第2回あいち木づくり表彰最優秀賞受賞



木の香る都市づくり事業

同 はくほう学童クラブ（尾張旭市） ↓



愛知県林務課が進める県内の木材利用促進の新たな展開については、都市の木質化プロジェクトが大きな起動モメントの役割を果たしたかもしれないが、「あいちの木材利用施設事例集」や「木の香る都市づくり事業」補助事例を見ると、昨年度の「流域圏担い手づくり事例集Ⅲ」で取り上げた、学童保育木造化プロジェクトの事例が数多く見受けられる。昨年の事例との繋がりを発見し、驚きを感じるとともに、各地域でのさまざまなプロジェクトが輻輳し、さらに愛知県がこれらをうまく活用していることに、大きな可能性を感じさせてくれた。まだまだ、これからなのであろうが。

愛知県木材利用促進条例 概要

目的（第一条関係）

木材の利用の促進に関する施策を総合的かつ計画的に推進し、もって県内の林業及び木材産業の自立的な発展、森林の有する多面的機能の持続的な発揮並びに循環型社会の形成に資するとともに、快適で豊かな県民生活の実現に寄与することを目的とする。

基本理念（第三条関係）

- 木材の利用の促進は、次に掲げる事項を基本理念として行われなければならない。
- ①県産木材の利用の促進を最も優先することを基本として、林業及び木材産業の発展が図られること。
 - ②豊かな森林資源が枯渇することなく次の世代に継承され、森林の有する多面的機能の発揮が図られること。
 - ③消費地からできる限り近接した地域の森林において生産された原木の優先的な利用に努めること等により、環境への負荷の低減に寄与すること。
 - ④県民の意識の高揚・自発的な取組が促進されること。

愛知県 木材利用の促進に関する基本計画

木材利用の促進に関する基本計画（概要）

第1 基本計画について

1 基本計画の位置づけ

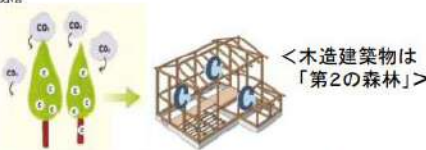
本計画は、「脱炭素社会の実現に資する等のための建築物等における木材の利用の促進に関する法律」（以下、「法」という。）及び「愛知県木材利用促進条例」（以下、「条例」という。）の規定に基づき定めるもの。
また、「食と緑の基本計画 2025」に基づく、農林水産分野の個別計画に位置づけ。

2 建築物等における木材の利用の促進の意義

○木材利用はSDGsの17の目標のうち、7つの目標に貢献。



○木材は、樹木が吸収した二酸化炭素を炭素として長期間、貯蔵し、鉄やコンクリート等の資材と比べて製造時のエネルギー消費が少なく抑えられ、かつ再生林により再生可能な地球環境に優しい資源。



- 木材は、調湿性等に優れるほか、心理面・身体面・学習面等での効果が科学的に実証されている。
- 愛知県では、スギやヒノキの人工林の多くが利用期を迎え、充実した森林資源の活用を図ることが重要。

第2 木材の利用の促進のための施策に関する基本的事項

1 木造・木質化の推進

県、市町村、森林所有者、林業事業者、木材産業事業者、建築関係事業者、その他事業者及び県民が一体となって、県産木材をはじめとする木材の利用が県内全域に広がることを目指し、木造・木質化を推進。

- (1) 民間建築物等における木材の利用
 - 住宅のほか、商業施設やオフィス等の木造・木質化を促進。
 - 企業活動における木材利用のメリットをPR。
 - 木材利用に対する支援等。
 - 建築物の木造化にあたってコストや技術面等の課題を明確化。

<民間建築物の事例>



都市の木造・木質化イメージ

- (2) 県の公共建築物における木材の利用
 - 率先して木造・木質化を推進。

<公共建築物の事例>



- (3) 県の公共工事における木材の利用
 - 積極的に木質資材の利用を推進。
- (4) 木製備品の導入

4. おわりに ～ いや、これから

2021年度の流域圏担い手づくり事例集Ⅲは「学童保育木造化プロジェクト」、今年度の事例集Ⅳは「錦二丁目都市の木質化プロジェクト」と、2年続けて都市部での木材利用促進の取り組みを紹介させていた。いずれも舞台は名古屋市であり、矢作川流域圏の事例ではないのでは、という方がいるかも知れないが、そうではない。単にいずれも矢作川流域（額田・豊田市）の木材が使われているからではなく、まず矢作川流域圏懇談会が設立された2010年の経緯を思い起こしてほしい。

黒田武義さん



市民会議の黒田武義氏が、山と山の百姓の現状を切々と訴え、「山や水の本当の問題・危機が、山に生きているわけではない方々にどれだけ理解されているのか？」との問いかけが、山部会の出発点「矢作川の恵みで生きる」の共有となったのである（矢作川流域圏懇談会10年誌 29P、47P参照）。この訴えは、矢作川流域圏下流の人たちだけに向けられたものではないだろう。

いわゆる矢作川流域圏をベースに課題解決を考えることはとても重要で、まず水、土砂、流木や栄養塩などの物質循環は、この流域圏の中で巡っている。片や、木材を始めとするモノの流通、そして人の動きはこれに寄らない。若者などを始めとする多くの人々が外部から矢作川流域圏に引き寄せられている状況は、今までの担い手づくり事例集で紹介してきた通りであり、すべての事象が流域圏内で完結しているわけではない。一方、海から見た流域圏という視点も重要であり、三河湾を含む伊勢湾での課題解決を考える時、矢作川のみならず、庄内川、木曽三川、宮川等々、海域・陸域合わせて概ね2万km²、流域圏人口は愛知・岐阜・三重・長野県まで一千万人以上に及ぶ広大な範囲だ。このことは、目をそらすず念頭に置いておかなければならないように思う。



さて、「錦二丁目都市の木質化プロジェクト」に話を戻そう。

15名もの方々からお話を聞き、ここで何が起こったのか、やっと全体像が見えてきた。舞台は3つ、まず錦二丁目、名古屋大学、そして矢作川上流の森である。このプロジェクトのテーマとして重要だと感じたのは以下の三つである。

- ① 様々な人たちが繋がり化学反応が起きたこと
- ② それがさらに新たな繋がりを生み、広がっていったこと
- ③ 活動が持続し、さらに世代も含めて継承していくために何が必要なのか？

● 繋がること

3つの舞台が繋がる前に起きたことがある。まず、錦二丁目（長者町）に活動場所を求めて、延藤安弘さんがやって来たこと。折しも、危機感を持った地元商店街メンバー中心の錦二丁目まちづくり協議会活動が始まった時期であり、ここと結びついていく。2003年には、延藤さんが「まちの縁側育くみ隊」を立上げ、拠点としていく。今回取材では地元の方々が皆口を揃えて延藤先生の存在が大きかったと仰っていたのが印象的である。



まちの縁側育くみ隊の名畑恵さん（現在の代表）



理事の藤森幹人さん（対話計画代表）
錦二丁目まち協・公共空間デザインプロジェクト長



延藤安弘さん

さて名古屋大学では、学問分野の壁を取払い（たこつぼからの脱却）、一つの目標に向かって進もうという文部科学省提唱のグローバルCOEプロジェクトとして、2009年に都市木が始まった。

環境学研究科と生命農学研究科（森林分野）が交わったのである。高野さん曰く、「まずは研究者が繋がり、そこから業界の人たちも繋がっていく」という戦略。「臨床環境学」というのが重要なキーワードで、錦二丁目現場としての白羽の矢が立った。仲立ちをしたのは、環境学研究科の村山顕人先生で、既に延藤先生と繋がっていた。私も古くから延藤さんを知っているが、彼は有数の（まちづくり）臨床医である。ここと繋がったのはある意味必然かもしれない。偶然ながら名古屋大学出身のM-easy 戸田友介さんが、豊田市旭地区に移住したのも2009年のこと。都市木はまず豊田森林組合と繋がり、その後2014年には豊田市旭地区の「旭木の駅プロジェクト」との交流が始まるのである。



村山顕人さん



M-easy 戸田友介さんと 2011年に始まった旭木の駅プロジェクト いづれも山村再生担い手づくり事例集1 (2014年3月) から

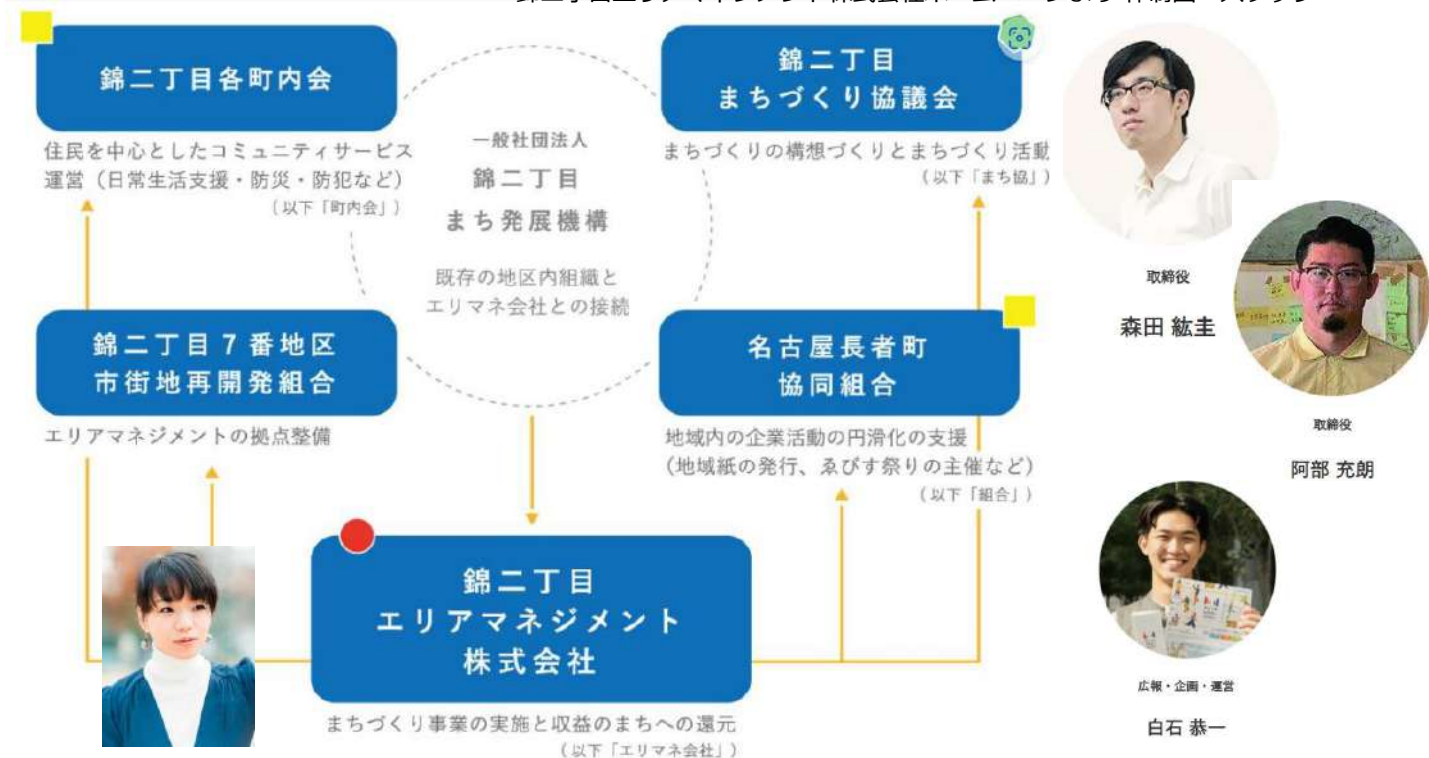
● 展開、広がること

3つの舞台が繋がった2010年以降、錦二丁目では様々な試みが行われた。特に大きな転換となったのは2014年の歩道拡幅社会実験だろうか。ここに愛知県林務課が注目し、行政として関わるようになる。2015年全国都市緑化あいちフェア、2016年あいちトリエンナーレでの協働を経て、木材利用促進の全県展開へと進んでいった。さらに都市での木材利用だけでなく、まちと森づくりの現場での交流が始まったのが2014年頃。錦二丁目旭木の駅プロジェクトに参加し、以降交流が毎年開催されていく。名畑さん、鍋田さん始め全ての方が「木材利用は森づくりに結びつかなければダメだ」と仰っており、これが都市木の本質でもあろう。

● 継続と継承

長く続けていくためには何が必要か？ 延藤さんが常々仰っていた言葉が思い起こされる。「ワクワクせなあかん！」新たなチャレンジをしつつ楽しむことが重要であり、だからこそ多くの若者たちも集まって来たのではない。錦二丁目は一つの手法に留まることなく、2015年に名古屋市の低炭素モデル地区に認定され、2018年にはエリアマネジメント株式会社（エリマネ）を設立した。この初代代表が、延藤さんの後継者・名畑恵さんである。延藤さんが「まちの縁側」を立ち上げた時には、まだ大学生だったという。このエリマネでは、実に多くの世代が交わっていることに気づく。長らく地域管理は行政が行うこととして任せていた分野であるが、エリアの住民・事業者・地権者が主体的にこれを行うことで、地域の魅力・賑わいなどを発現させようとするもの。まさしく地域資源の発見と活用がキーワードとなる。

錦二丁目エリアマネジメント株式会社ホームページより 体制図・スタッフ



行政任せにしないエリマネは、その地域で様々な効果を生み出す。地域の魅力発見とさらなる創造、世代をも超えたコミュニケーションの再生、そして地域での人材育成に果たす役割も大きいと感じる。発端は寂れていく商店街に対する危機感だというのが、ここで始まった都市再開発事業に対しても古くから残る「会所」というまちの文化を残すべく、これに向き合ったのである。新たな都市の会所づくりとして臨んだのが、再開発ビル「オリマチ錦」内の拠点空間創出であり、2022年6月、クラウドファンディングでの支援も得て「喫茶 七番」「スペース 七番」がオープンした。ここで活躍するのが、阿部充朗さん、白石恭一さんなど若いスタッフである。名畑社長は、彼らに更なる飛躍・役割も期待しているようだ。

エリマネという手法が今後重要となってくるのは、錦二丁目のような都市域だけではないような気がしている。豊田のような地方都市や過疎に悩む山村などでも求められるものでは、と思ってしまう。よくよく考えると、今までこの事例集で取り上げてきたある意味先進的な事例は、行政任せにしないエリマネ的な要素がある。後は、これをどのようにシステム的に地域に根付かせるか、ということかもしれない。

先に述べた豊田市旭地区の戸田友介さんは、既に山の百姓として獅子奮迅の活躍をされている。事例集で何度も取材しているが（「山村再生担い手づくり事例集Ⅰ」/ M-easy・旭木の駅プロジェクト、「山村再生担い手づくり事例集Ⅱ」/ あさひ若者会、「流域圏担い手づくり事例集Ⅱ」/ つくらッセル）、日々進化をしているとも聞いており、改めて山間地のエリマネ的な視点で話を伺いたいと思う。

今回事例集取材期間中に 豊森なりわい塾・澁澤寿一塾長 とお話をすることがあり、その中で、これから日本社会がアジェンダ2030、SDG s を踏まえた健全な社会を目指すのであればということで、「戸田友介という生き方」が話題となった。地域で35の役職を担い、正にマルチワーク（多業）の実践者であるが、よそ者であるはずの彼が地域で受け入れられ、さらに多くの仲間と共にある意味エリアマネジメントを展開している構図は、おそらく都市である錦二丁目とは大きく異なるはずだ。



2023年1月26日 澁澤さん講演会（名古屋市内）
「渋沢栄一の思いとSDG s の交点」
～ 都市の いいとこどり では何も解決しない

● エリマネから流域マネジメントへ

錦二丁目がコロナ禍で中断していた山との交流を再開しようとしており、私たちも2022年より「学生たちを森へ」の取り組みを本格的に始めた（「流域圏担い手づくり事例集Ⅲ」参照）。さあ、「さあ、みんなで山へ森へ行こう」の言葉で「おわりに」を締めくくろうと思ったのであるが、待てよ。私たちは、そこで何を見て、何を学べばよいのだろうか、はたと考え込んでしまった。ここで冒頭の山の百姓・黒田さんの問いかけに立ち返る。「山・水の本当の危機が理解されているのか？」

懇談会山部会でも議論されてきた話ではあるが、山の管理、とりわけ林業の担い手は非常に高いリスクを負う。安全管理が十分になされていない現実がある。また今回の取材を通じて、山側の問題点が経済的自立性などいろいろ指摘されているが、果たしてそれらは山側・川上側だけに押し付ける課題なのだろうかとも思う。

前述の澁澤寿一さんに伺った話は、直ちに200名程の講演会にて披露してもらった。アジェンダ2030とは、2030年までに地球を守るために具体的な行動を起こさないと、もう引き返せないという最終リミットを意味している。その具体的な目標がSDG s の17項目なのであるが、例えば環境破壊を生業としているような企業が17の目標の内、わずかに出来ることだけを「いいとこどり」し自己満足していても、いたずらに最終リミットを迎えることになるとの強烈なメッセージであった。

そうか、企業だけじゃない。大きな人口を抱える都市自体も流域圏の「いいとこどり」で成り立っている存在なのではないか、そのことを意識して山を見なければならぬのだろう。山の管理だけでなく、海もそうだ。上流の都市（だけではないが）が経済的で便利・快適、効率的な暮らしをするための代償として、大量のプラスチックごみを受け入れることとなる。誰が本当にそれを負担すべきなのだろうか。

地域の課題を解決するために、エリアマネジメントという手法がそれぞれの地域特性に応じて進められるべきであろう、しかしながら同時に山から海まで含めた流域圏のマネジメントも極めて重要だと認識できた。それをエリマネと違って誰が担うかなど、とても難しい課題とは思ふ。流域圏全体での公共投資、税金の再配分、新たなシステムづくりなど含めての課題なので、誰が主導すべきかは明らかか。これを進めるためには、「矢作川の恵みで生きる」あるいは「伊勢・三河湾流域圏の恵みで生きる」ことの共有が大前提であり、山部会だけの課題ではないのである。

都市の木質化プロジェクトの年表

赤字は愛知県行政関係

年	錦二丁目まちづくり協議会・都市の木質化プロジェクト	名古屋大学、愛知県、豊田市などの動き
2000	長者町織物協同組合50周年記念事業開催 (記念祭、シャッターペイント)	
2001	50周年記念以降「あびす祭り」が毎年秋に開催される	
2002	錦二丁目まちづくり協議会活動が開始	
2003	延藤安弘氏が名古屋を拠点に「まちの縁側育くみ隊」を設立し、代表 となって活動開始	
2004	錦二丁目まちづくり協議会発足(設立総会開催) ～ 延藤さんが基調講演を行う	矢作川水系森林ボランティア協議会発足(1月)
2005	「まちのデザイン塾」始まる	「矢作川森の健康診断」始まる ～2014年
2008	延藤氏、錦二丁目「まちの会所」代表に	
2009	錦二丁目マスタープラン策定開始、延藤さんが招聘される	名古屋大学「都市の木質化プロジェクト」発足
2010	第1回あいちトリエンナーレ2010会場に 名古屋大学から錦二丁目「都市の木質化」アプローチ	名古屋大学から豊田森林組合へアプローチ 加工グループの山田政和さんが参画していく
2011	都市の木質化ワークショップ開催(2月) 以降、ウッドデッキの設置などが錦二丁目で展開されていく 錦二丁目マスタープランが地域合意される(4月)	旭木の駅プロジェクトが設立(3月) 名古屋でのシンポジウムにて「都市の木質化宣言」採択 (11月) 豊田から原田裕保、山田政和氏も署名
2013	あいちトリエンナーレ2013に錦二丁目参画	名大・佐々木先生と旭木の駅が出会う(高野先生紹介)
2014	歩道拡幅社会実験を実施(9月～2015.2月) 豊田市旭地区で最初の森の健康診断体験(12月)	歩道拡幅実験を愛知県・森岡副知事が視察 以降、愛知県林務課が錦二丁目に関わる(鍋田氏) 旭木の駅プロジェクトと錦二丁目との交流会が始まる
2015	名古屋市から低炭素モデル地区に認定される(2月) 都市緑化フェア終了後、モリコロパークから木材移設される	全国都市緑化あいちフェアで休憩施設を試作(予算化)
2016	あいちトリエンナーレ2016に錦二丁目参画(会場)	トリエンナーレ錦二丁目会場に対して予算措置、 会場木質化で協働した
2018	延藤安弘氏逝去(2月)、偲ぶ会開催(5月) 錦二丁目エリアマネジメント株式会社設立(3月) 名畑恵社長	木材・木造建築物学生会 MOKKO が結成(2月)
2019		県が「木の香る都市づくり事業」補助を開始 全国植樹祭あいち開催(6月)～木材が山と都市をつなぐ
2020		県補助金活用し、あおぞら学童保育クラブ(緑区)完成
2021		県補助金活用し、松栄第Ⅰ学童保育クラブ(昭和区)完成 愛知県木材利用促進条例制定
2022	錦二丁目再開発地区においてスペース七番、喫茶七番が オープン(6/11) ～クラウドファンディング(4～5月)、県補助金も活用する	愛知県木材利用促進条例施行(4月) 木材利用促進に関する基本計画策定(4月) 矢作川流域圏懇談会が「錦二丁目都市の木質化プロジェ クト」をテーマとした流域圏担い手づくり事例集Ⅳの作成 に着手



(執筆者：近藤 朗)

取材者名

石原 淳（アジア航測株式会社）

沖 章枝（水と緑を守る会・岡崎）

金井 亮介（アジア航測株式会社）

川崎海斗（信州大学農学部）

近藤 朗（愛知・川の会）

佐竹寅次郎（信州大学農学部）

洲崎燈子（豊田市矢作川研究所）

高橋伸夫（西三河野鳥の会）

筒井千遥（アジア航測株式会社）

名畑 恵（錦二丁目エリアマネジメント株式会社）

浜口美穂（ライター）

三ツ松由有子（地域の未来・志援センター）

（五十音順）